

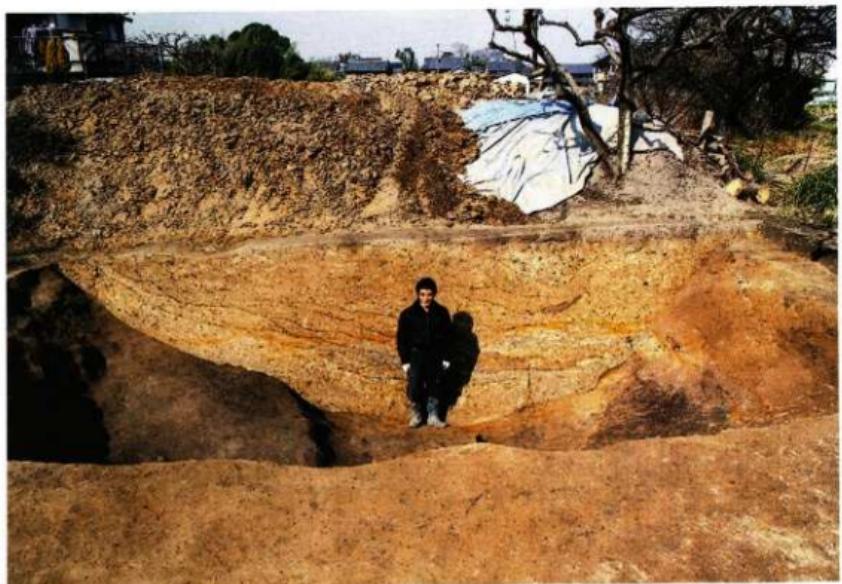
大和郡山市文化財調査報告書第14集

筒 井 城

第8次・第9次発掘調査報告書

2009

大和郡山市教育委員会



SD-02 土層堆積状況（上半部分 南より）



SD-01 斜面遺物出土状況（北東より）



第1トレンチ 全景（北東から）



第1トレンチ SD01南半（北から）

筒井城第8次発掘調査報告書

例　　言

1 本書は、大和郡山市筒井町1483で実施した発掘調査の報告書である。

2 調査は、筒井城跡の範囲確認調査として実施した。

3 調査期間、調査面積は下記の通りである。

調査期間：2005年1月5日～2月28日

調査面積：約177m²

4 調査は、以下の組織で実施した。

現地調査

調査員：山川均（大和郡山市教育委員会 社会教育課）

補助員：下高大輔（奈良大学大学院）、長谷川義明、藤田葵、大江綾子（以上奈良大学）

事務

大和郡山市教育委員会 社会教育課

5 本書は、以下の分担で作成した。

製図・拓本・トレース：長谷川

写真撮影：山川（遺構）、長谷川、大江（遺物）

執筆：大江（Ⅲ章2項）、山川（その他）

編集・レイアウト：大江、山川

6 調査および報告書作成に際し、動元興寺文化財研究所、佐藤亜聖氏より貴重な御教示・御指導を得た。

7 調査に関わる写真・スライド・実測図および出土遺物は全て大和郡山市教育委員会で保管している。広く活用されたい。

8 現地調査に際しては、土地所有者の堀江宏史氏および筒井順慶顕彰会（会長・藤本賢司氏）より多大な御協力を得た。

凡　　例

1 遺構実測図に示した標高は、全て東京湾平均海面（T.P.）からのプラス値である。

2 遺構実測図中の座標は、世界測地系に基づくものである。また、図中矢印で示した方位は座標北を示す。

3 遺物番号は全て通し番号になっており、実測図・観察表・図版それぞれの対照が可能である。

4 遺物実測図の断面は、陶磁器・須恵器がベタ塗り、瓦器・瓦質土器・瓦がアミがけ、土師器は白抜きとしている。

5 土色および遺物の色調に関しては、『新版標準土色帳』に掲げる。

本文目次

I 調査の契機および経過.....	1
II 調査の概要.....	3
1 遺構	3
(1) SD-01	3
(2) SD-02	6
(3) SD-03	6
(4) 盛土	8
2 遺物	9
(1) SD-01出土遺物	9
(2) SD-02出土遺物	17
(3) SD-03出土遺物	22
(4) 盛土出土遺物	22
(5) 瓦	24
(6) 金属製品	27
III まとめ	28

図目次

図 1 調査位置図 (S : 1/25,000)	1
図 2 トレンチ配置図 (S : 1/2,000)	1
図 3 筒井城5次調査検出の内堀（西より）および出土した鉄砲玉（右下）	2
図 4 調査地に南接する東西方向の堀跡（東より）	2
図 5 内堀想定復元図	2
図 6 主郭部周辺空中写真（1963年撮影・S : 1/3,000）	2
図 7 調査前の状況（南より）	3
図 8 調査風景（掘下）	3
図 9 SD-01完掘状況（北より）	3
図10 遺構平面図 (S : 1/100)	4
図11 サブトレ2西壁土層（SD-01・SD-02切合状況）図 (S : 1/50)	5
図12 SD-01土層堆積状況①（北東より・図11に対応）	5
図13 SD-01土層堆積状況②（北東より・図11に対応）	5
図14 SD-01斜面遺物出土状況（北西より）	5
図15 調査区南半完掘状況（北より）	6
図16 SD-02土層堆積状況（上半部分・南より）	6
図17 SD-02土層堆積状況（下半部分含む・南より）	6
図18 SD-02北壁土層図 (S : 1/50)	7
図19 SD-03西壁土層図 (S : 1/50)	8
図20 トレンチ西壁土層にみえる土壘の痕跡 (S : 1/100)	8
図21 調査風景（土層実測）	8
図22 埋戻し後の状況（南東より）	8

図23	SD-01	1層出土遺物写真	9
図24	SD-01	1層出土遺物実測図 (S : 1/3)	10
図25	SD-01	2層出土遺物実測図① (S : 1/3)	11
図26	SD-01	2層出土遺物実測図② (S : 1/3)	12
図27	SD-01	2層出土遺物写真	13
図28	SD-01	3層出土遺物写真	14
図29	SD-01	3層出土遺物実測図 (S : 1/3)	15
図30	SD-01	4層出土遺物実測図 (S : 1/3)	16
図31	SD-01	4層出土遺物写真	16
図32	SD-01	5層出土遺物実測図 (S : 1/3)	17
図33	SD-01	5層出土遺物写真	17
図34	SD-02	1層出土遺物実測図 (S : 1/3)	18
図35	SD-02	2層出土遺物実測図 (S : 1/3)	19
図36	SD-02	2層出土遺物写真	19
図37	SD-02	3層出土遺物写真	20
図38	SD-02	3層出土遺物実測図 (S : 1/3)	21
図39	SD-02	4層出土遺物実測図 (S : 1/3)	22
図40	SD-02	4層出土遺物写真	22
図41	SD-03	1層出土遺物実測図 (S : 1/3)	23
図42	盛土層出土遺物実測図 (S : 1/3)	23	
図43	盛土層出土遺物写真	23	
図44	SD-01	出土軒瓦写真	24
図45	SD-01	出土軒瓦実測図 (S : 1/4)	25
図46	SD-01	出土瓦実測図 (S : 1/4)	26
図47	SD-01	出土瓦写真	26
図48	SD-02・03	出土瓦写真	26
図49	SD-02・03	出土瓦実測図 (S : 1/4)	27
図50	出土鉄砲玉実測図 (S : 1/1)	27	
図51	出土鉄砲玉写真	27	

表 目 次

表1	出土遺物観察表①	30
表2	出土遺物観察表②	31
表3	出土遺物観察表③	32
表4	出土遺物観察表④	33
表5	軒丸瓦観察表	34
表6	軒平瓦観察表	34
表7	丸瓦観察表	34
表8	平瓦観察表	34
表9	金属製品観察表	34

I 調査の契機および経過

筒井城は戦国期の大和を代表する国人・筒井氏の居城として著名である。その規模は東西約500m、南北約400mに及び、大和における平地式城館としては最大級である。また、筒井城や筒井氏は『大乘院寺社雜事記』や『多聞院日記』などの文献に頻出し、その動向がかなり具体的に判明することも特徴といえる（金松2004）。

このような遺跡の重要性に鑑み、大和郡山市教育委員会は城郭談話会と共同で平成14年度に筒井城・筒井氏に関する総合的な調査を実施、その成果は、翌年に『筒井城総合調査報告書』（大和郡山市教育委員会・城郭談話会編）として出版された。一方、市教委では筒井城の実態を地下構造から探るべく、平成14年度より城域内において計画的発掘調査を実施している。ここで報告するのはその第3回目の調査にあたり、筒井城全体の調査では第8次調査となるものである。

平成14年度に実施した筒井城第5次調査は今回の調査地より約40m北で実施したものだが、その際には幅12m以上、深さ2m以上の筒井城内堀と見られる遺構（南北方向）が検出され、さらにその北岸部分に食い込む形で鉄砲玉が出土し、話題を呼んだ（図3）（大和郡山市教育委員会2004）。

今回の調査地はこの内堀の延長部分に該当するが、現状ではここで堀跡は途絶え、陸橋状の部分（現状で島）となっている。そして、この陸橋状の部分を隔てて、その南には東西方向の内堀跡（現状で蓮島）が拡がる（図5）。ちなみに筒井城では、この内堀の他に外堀（惣堀）の存在が知られているが（村田1980・山川1996・高田2004）、発掘調査はなされていない。

この陸橋状の部分については、戦国期までさかのほるものなのか、あるいは城郭が機能していた



図1 調査位置図 (S: 1 / 25,000)



図2 トレンチ配置図 (S: 1 / 2,000)



図3 筒井城第5次調査検出の内堀（西より）
および出土した鉄砲玉（右下）



図5 内堀想定復元図



図4 調査地に南接する東西方向の堀跡（東より）



図6 主郭部周辺空中写真
(1963年撮影・S:1/3,000)

時期には存在せず、後世に通行のために造られたものであったのか（換言すれば、南北方向の堀と東西方向の堀は途切れていたのか、つながっていたのか）は城郭研究者の間でも従前より議論があった。この問題は城郭中枢部分の構造に関わるものだけに、きわめて重要である。よって、今回の調査の主眼はこの問題の解決におかれた。また、ここが当初より陸橋的な施設であったことが判明した場合、その具体的な機能や意味についても、発掘データを基に可能な限り検討を加えることも副次的に目的として掲げた。

調査は平成17年1月5日に開始し、同年2月28日に終了した。調査地周辺に廃土を置くスペースが確保できなかったため、一筆の畠を南北に二分割して実施した。また、重機の進入路がないため、掘削や埋め戻しは全て人力によった。調査面積は177m²である。

II 調査の概要

1 遺構

今回検出された遺構は、全て堀（内堀）遺構である。以下に、その概要を記す。

(1) SD-01

第5次調査で検出された内堀の延長部分で、調査の結果これが現状通りの部位で途切れていることが判明した。したがって上述の陸橋部分は、本遺構の埋没時期（16世紀第3四半期）までさかのばることが明確になった。深さは最深部分で検出面から2.2mを測るが、今回検出されたのは堀の南端部分なので、実際はさらに深かったものと思われる。堀幅は約13mであるが、調査区北側には堀の斜面と思われる切岸が地表面で良好に観察可能で、その幅は約16mである（図10に示す）。したがって堀の本来の幅はこの程度と考えて大過ないであろう。

堆積土は大きく5層に分けられ、遺物の取り上げもこの分層に基づいて行った。土層はいずれも埋戻しに伴う人為的な堆積土であり、自然堆積土は看取できなかった（図11～13）。堀を半分程度埋めた段階（4・5層）で淡黄色の粘土で斜面を覆っており（3層）、この上面の堆積層（2層）中から多量の遺物が出土している（図14）。内堀はいったんこの3層まで埋戻され、この面で祭祀行為を行った後、しばらく間をおいて完全に埋戻された（1層）ことが判明する。

時期は、II-1項で詳細に報告するが、1層から瀬戸・美濃焼丸皿（藤澤編年大窯第3段階後半）が出土しており（図24-18）（藤澤2007）、共伴遺物も大和I₂型III-1型式土釜（図24-15～17）（川口1990）、やF期瓦質土器押鉢（図24-21）（佐藤1996）なので、埋戻しの下限時期は16世紀第4四半期に位置付けられる。3層から出土している瀬戸・美濃焼天目茶碗（図29-94）は大窯第2段階後半まで遡り、先述の丸皿より若干古い。また、同層中からは



図7 調査前の状況（南東より）



図8 調査風景（掘下）



図9 SD-01 完掘状況（北より）

※ SD-02は未掘

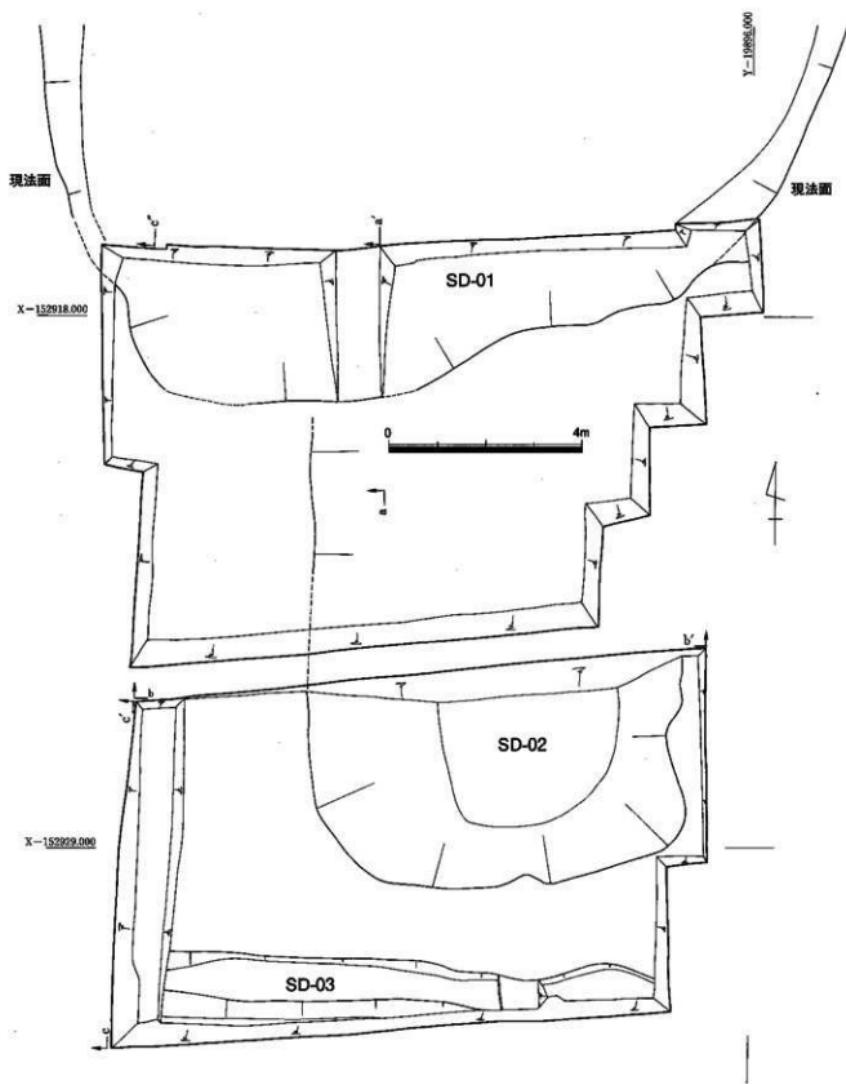


図 10 遺構平面図 (S : 1 / 100)

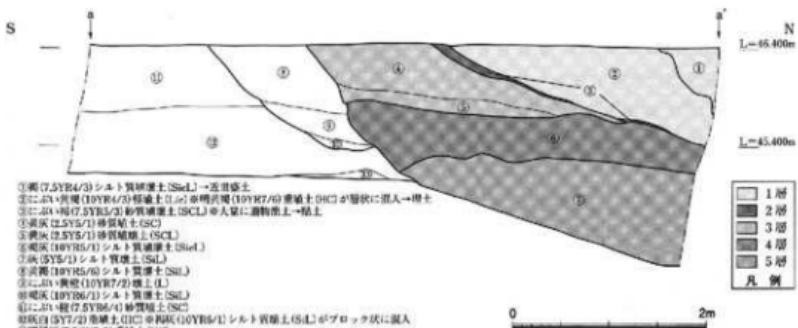


図 11 サブトレ 2 西壁土層 (SD-01 · SD-02 切合状況) 図 (S : 1 / 50)



図 12 SD-01 土層堆積状況① (北東より・図 11 に対応)



図 13 SD-01 土層堆積状況② (北東より・図 11 に対応)

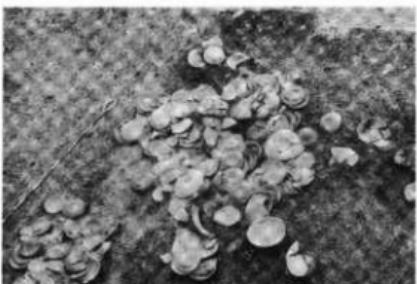


図 14 SD-01 斜面遺物出土状況 (北西より)

E期の瓦質土器摺鉢（佐藤1996）も出土しており、16世紀第3四半期に位置付けられる。この時期説は、第5次調査において示された内堀の埋設時期とも一致する（大和郡山市教育委員会2004）。

なお、堀の斜面（4・5層）から鉄砲玉が2点出土している（図50-M1・M2）。鉄砲玉は上述のように第5次調査でも出土しており、時期も同じであることから、同じ争乱において使用されたものである可能性が高い。

上記した点を総括すると、このSD-01は16世紀第3四半期にいったん半分以上が埋戻され、その際に土師皿を用いた祭祀が行われる。その後、若干の時間差において、16世紀第4四半期に完全に埋戻されるものと考えられる。

(2) SD-02

上述のSD-01に切られる形で検出された、それに先行する時期の内堀と考えられる遺構である。幅約8m、深さは検出面より約2.5mを測る。当初は断面V字形のものを、途中から断面U字形のものに造り変えており、その際に厚さが40cmに及ぶ灰白色の粘土を整地のために敷いている(3層)。この時、深さは1.6m程度まで浅くなっているが、この改修については、湧き水などによる斜面の侵食防止と推定されよう。ここでは改修以前の堆積層(3層以下の堆積層)を4層と呼び、3層より上の堆積層を2層と称する。なお、2層を掘り込む形で幅約2.2m、深さ約90cmの溝が掘られており、ここではその堆積層を1層と呼ぶ。4層は改修時の埋戻し土であり、2層はこの堀の埋戻し土である。

下限時期は、2層中にE期の瓦質土器摺鉢(図35-134)(佐藤1996)が含まれていることから、16世紀第3四半期、改修時期は3層中にD期の瓦質土器摺鉢(図38-144・146)(佐藤1996)が含まれていることから考えて、16世紀前葉と考えられる。なお、4層中には明確に時期決定し得る遺物は出土していないため、本遺構の上限時期については明確にできない。

(3) SD-03

調査区の南端部分で検出された、東西方向の堀と考えられる遺構である。今回はその北岸部分の幅約1m分のみが検出されている。現在、東西方向の内堀跡と思われる痕跡(蓮島)が里道を隔てて調査地の南に残っているが、本来、堀の北端は今回の検出部分まで伸びており、したがって里道は堀の埋没後に造られたものであることが判明する。深さは検出面より約1.2mを測るが、中心に向かってさらに深くなることが予想される。一度掘り直された痕跡があり、ここでは古い方の堆積層を2層、新しい方を1層と称する。ただ、2層中から図化可能な遺物は出土しておらず、時期も判然としない。1層も同様であるが、土師皿の形態は16世紀中葉のものである可能性が高い。



図15 調査区南半完掘状況(北より)



図16 SD-02 土層堆積状況(上半部分・南より)

*人物の身長 164cm



図17 SD-02 土層堆積状況(下半部分含む・南より)

*人物の身長 162cm

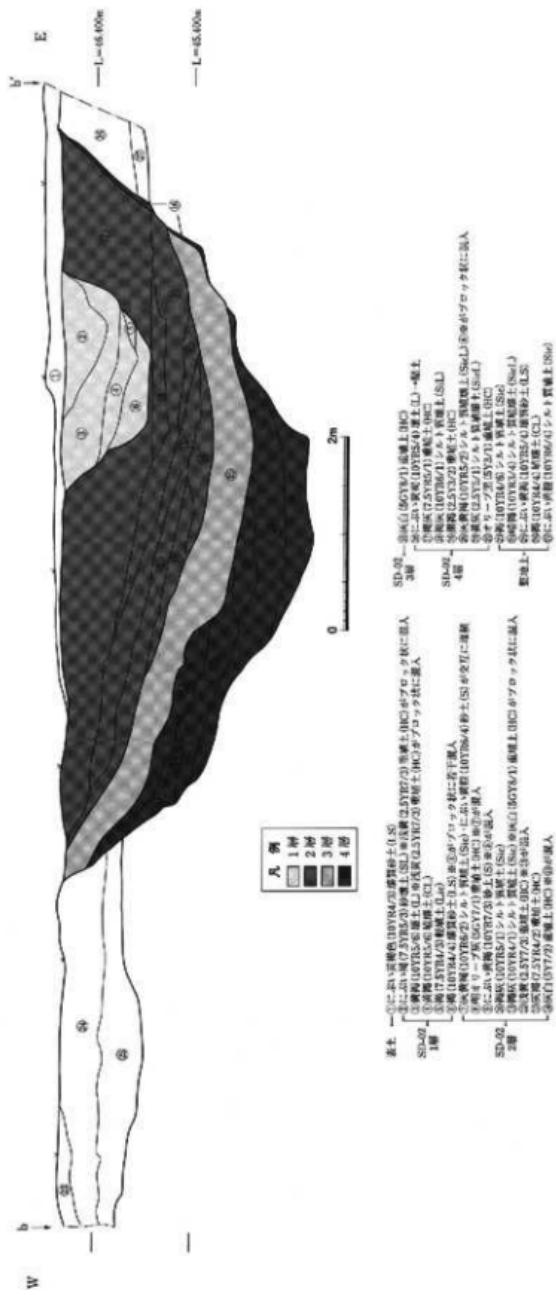


图 18 SD-02 北壁土层图 (S : 1 / 50)

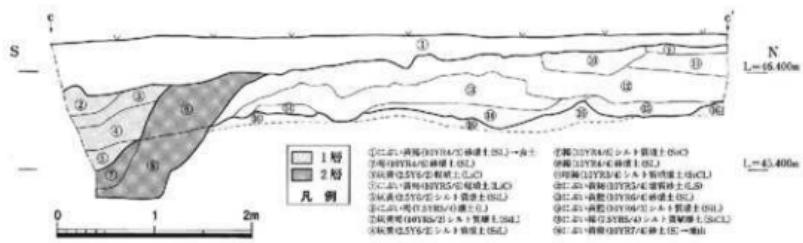


図 19 SD-03 西壁土層図 (S : 1 / 50)

(4) 盛土(土累?)

明確な造構ではないが、堀のない部分には地山上に盛土が見られた。遺物も時期幅が見られ(図42)、正確な盛土の造成時期は不明であるが、このうち西壁のセクションにはSD-01とSD-03間にそれぞれの堀の斜面から立ち上がり、また両者の中心に向かって立ち上がりを見せる土層が認められる(図20)。これについては、東西方向の土塁の基底部とも想定し得るものであり、その場合の基底部の幅は約11mとなる。

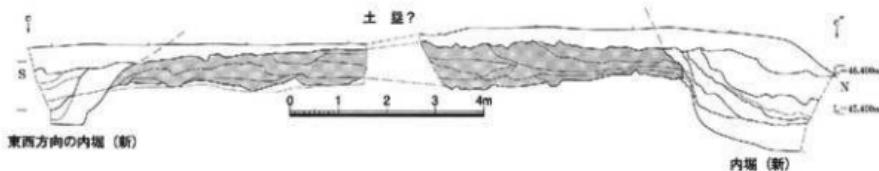


図20 トレンチ西壁土層にみえる土壟の痕跡 (S:1/100)



圖 21 調查風景（土層實測）



図22 埋戻し後の状況（南東より）

2 遺物

(1) SD-01出土遺物

1層出土遺物 1～14は土師器皿。このうち1～8は、いわゆる「へそ皿」である。器壁を強くヨコナデし、口縁を外反させる。底部は指頭で押圧することによって上げ底にした後、仕上げの調整は行わない。9～11は内面および外面口縁にナデを施す。12、13は、いずれも口縁付近に灯芯痕が認められ、灯明皿として使用されたと考えられる。14は底部に黒斑を有する。内面および外面の口縁部にナデを施す。15～17は土師器羽釜で、菅原分類の大和I₂型（菅原正明1983）、川口編年Ⅲ-1(川口宏海1990)に相当し、16世紀後半。15は内面に當て具の痕跡を明瞭に残す。18は、灰釉瀬戸・美濃焼丸皿で、藤澤編年大正第3段階後半（愛知県史編さん委員会2007）のもので、16世紀後葉。底部には輪ドチの痕跡が残る。19は信楽焼摺鉢で、摺目は確認できる範囲で4条。口縁はヨコナデによって強く外反する。松澤編年VI期（松澤修2004）で、16世紀中葉～17世紀初頭。20は瓦質土器香炉。内面はナデ、外面はハケメが明瞭に残り、底部は無調整である。21は瓦質土器摺鉢で、口縁を強くヨコナデして外反させ、S字状にする。近江編年6期（近江俊彦1994）、佐藤編年F期（佐藤亜聖1996）に該当し、16世紀中頃～末。22は瓦質土器こね鉢。外面には指頭圧痕やハケメが残る。23は瓦質土器風炉。胴部に円形の窓を施し、外面は丁寧にミガキを施す。24は瓦質土器深鉢。内面には指頭圧痕が残る。25、26は中国製磁器染付（青花）皿。25は内面の口縁付近と底部に圓線を施す。26は見込みに蟠龍文と思われる文様を描く。底部に「十」と書かれる。27は中国製白磁皿で、口縁が端反となる。森田分類E-2類（森田勉1982）である。

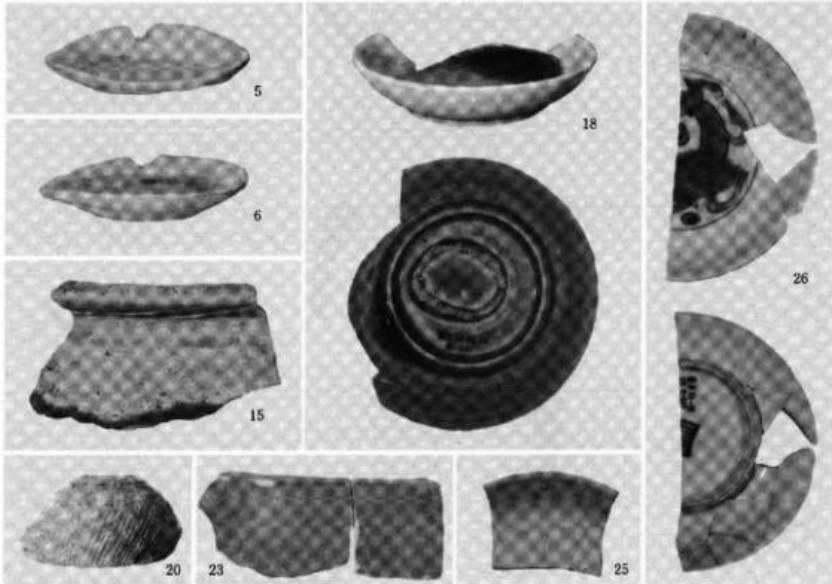


図23 SD-01 1層出土遺物写真

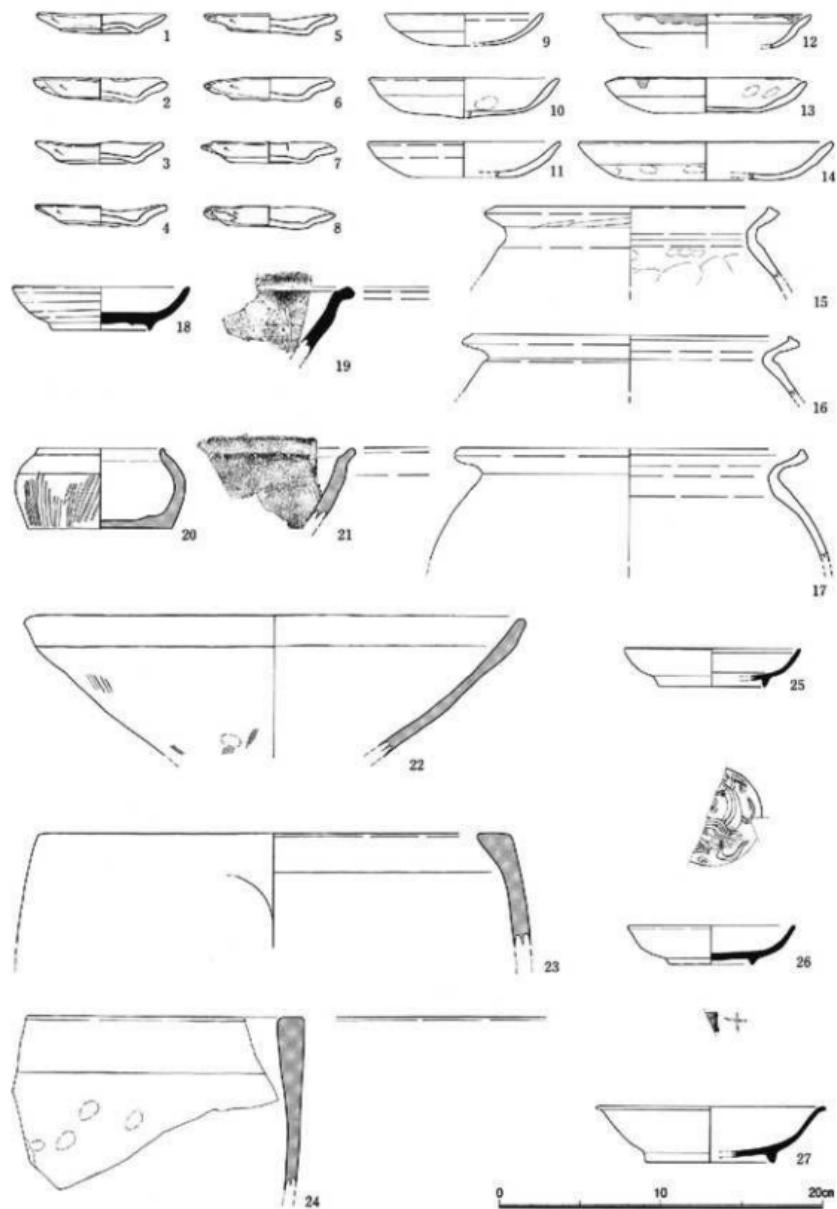


図24 SD-01 1層出土遺物実測図 (S:1/3)

これらの遺物に関しては、16世紀中葉～末の時期觀が与えられる。したがって、SD-01の埋め戻し下限時期は16世紀第4四半期に位置づけられる。

2層出土遺物 28～57は土師器皿。2層からは破片も含めて150点近くの土師器皿が出土した。このうち28～34は、底部中央を上げ底にする、いわゆる「へそ皿」である。出土点数は完形のものだけで76点、破片も含めると129点に及ぶ。大半は赤色系だが、一部白色系のものもみられる。完形

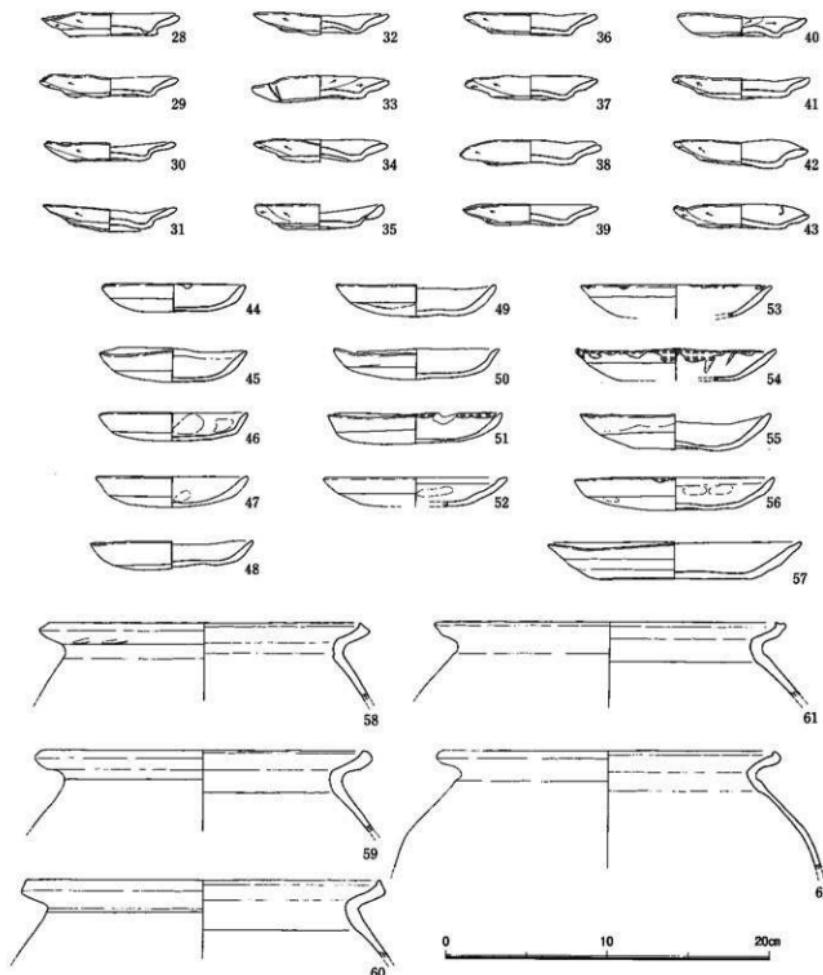


図25 SD-01 2層出土遺物実測図① (S: 1/3)

品のうち、9点には口縁端部を意図的に打ち欠いた痕跡がある。また、口縁部に灯芯痕があり、灯明皿として使用されたものが2点ある。28、29には底部に粘土円盤切り込みの痕跡がある。44～57は、いずれも白色系の色調を呈し、口縁部を体部の立ち上がりと同じ角度のまま収め、内外面の口縁部をヨコナデ、内面体部・底部をユビオサエによって成形する浅身のものである。底部外面は無調整のものがほとんどだが、44、45、49のように一部ナデを施すものもある。「へそ皿」とは異なり、法量のヴァリエーションが非常に豊富である。44は、口縁部に灯芯痕がある。49、55の外面には切り込み円板技法による結合痕跡が認められる。51は、口縁の4分の1ほどに灯芯痕が広が

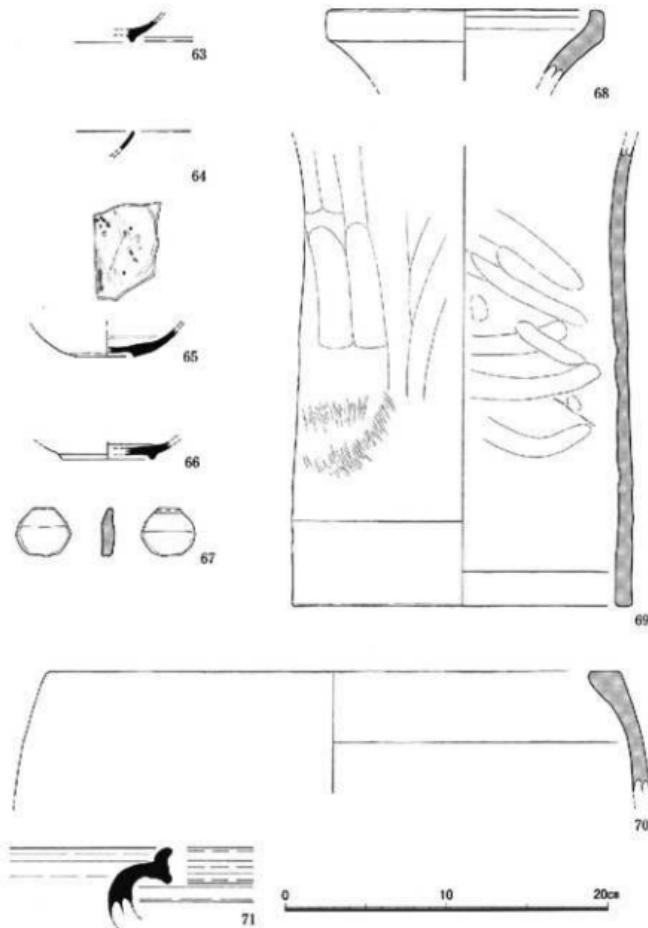


図26 SD-01 2層出土遺物実測図② (S:1/3)

り、打ち欠いた痕跡も認められる。53、54、56の口縁部には広い範囲の灯芯痕が認められる。57の底部内面は一方向のナデで仕上げ、口縁部をヨコナデする。底部は外面とともに黒斑が認められる。

58~62は土師器羽釜で、苔原分類の大和1₂型、川口編年III-1型式に属し、16世紀後半。いずれも体部にはタタキ、口縁部はヨコナデを施す。口縁を引き出す際に一部ナデ上げる。また、還元気味に焼成されており、断面が黒色もしくは灰色を呈す。

63は中国製の白磁皿。高台は一部露胎している。64は中国製染付（青花）で、器種は不明。内外面の口縁部に圓線を描く。65、66は中国製染付（青花）皿である。65は碁笥底で、見込みには草花文と二重圓線が描かれる。高台は幅1cmほどで種をふき取る。破断面には漆が付着し、漆錆ぎの痕跡と考えられる。15世紀末~16世紀中葉。66は景德鎮窯系と考えられる。底部見込みと外面の高台と体部の境に圓線を施す。疊付に砂が付着する。

67は土製円盤である。瓦質土器を原材料とする。68、69は瓦質の土管。68は表面をミガキで仕上げる。69は内外面ともナデによる指頭圧痕が明瞭に残る。68と69の直径には大きな差がある。70は瓦質土器火鉢である。内面はヨコナデ、外側はミガキによって仕上げる。

71は常滑燒甕。中野編年6a型式（中野晴久1995）で、13世紀第3四半期のものである。他の遺物との時期差が大きいことから、混入の可能性が高い。

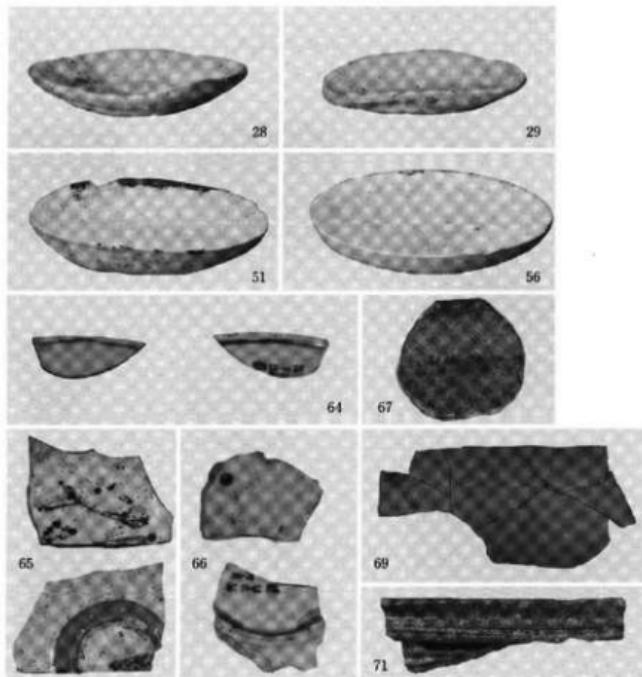


図27 SD-01 2層出土遺物写真

3層出土遺物 72~92は土師器皿である。72~75は底部中央を上げ底にする、いわゆる「へそ皿」である。いずれも外面底部をユビオサエ、口縁は強いユビオサエによって器壁を立ち上げた後ヨコナデし、内面を「の」字状にナデ上げる。赤色系(73、75)と白色系(72、74)が見られる。72は、口縁部にスヌが付着しており、灯明皿の可能性がある。また、口縁部は意図的に打ち欠かれている。

「へそ皿」以外の皿は、外面底部をユビオサエ、内面と外面口縁部はヨコナデが施される。法量のヴァリエーションが豊富で、口径が9cm前後のもの(76~78)、11.5cm前後のもの(81~86)、12.5cm前後のもの(87~90)、13.5cm以上のものの(91、92)に大別できる。76は、口縁部をやや肥厚させる。79は、器壁に粘土の結合痕跡が認められる。92の底部は、内外面とも黒斑を有する。

93は土師器羽釜である。調整は摩滅により不明。菅原分類の大和I₂型、川口編年皿-I型式に属し、16世紀後半。

94は瀬戸・美濃焼の天目茶碗。藤澤編年大窯第2段階後半のもので、16世紀中葉。95は中国製磁器染付(青花)碗。見込みに砂目あり。景德鎮窯系。

96~98は瓦質土器火鉢。96は口縁付近に突帯を2条巡らせるが、文様はない。色調は橙色を呈する。97、98は、口縁端部を内側に肥厚させる。残存している部分はすべてヨコナデが施される。99、100は摺鉢である。99は、やや内済しながら斜め上方向に広がる体部と口縁部を持つ。口縁部は強くナデを施し外反させる。内面はヨコナデ、外面はハケで調整したのちユビオサエを施す。100は摩滅のため内外面は調整不明。101はこね鉢である。内面にはミガキ、外面にハケとユビオサエが認められ、口縁部はヨコナデを施す。

これらの遺物より、SD-01・3層は、16世紀中葉の時期観が与えられよう。したがって、最初の埋め戻し時期の下限は16世紀第3四半期に位置づけられる。

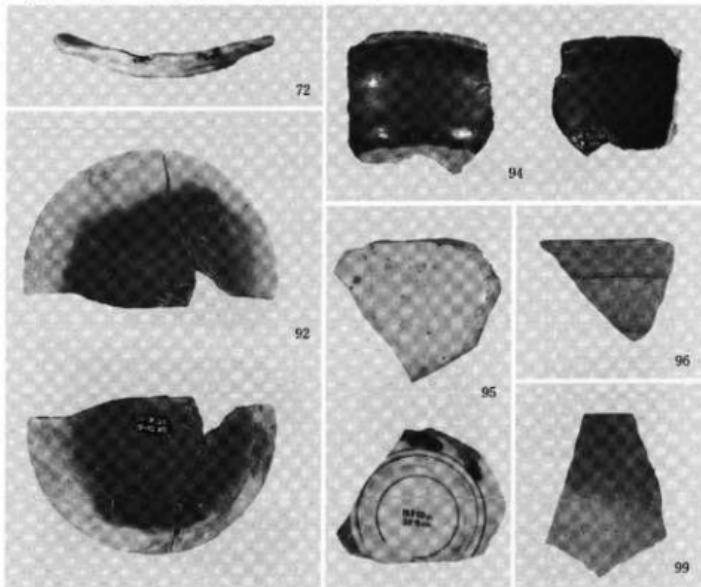


図28 SD-01 3層出土遺物写真

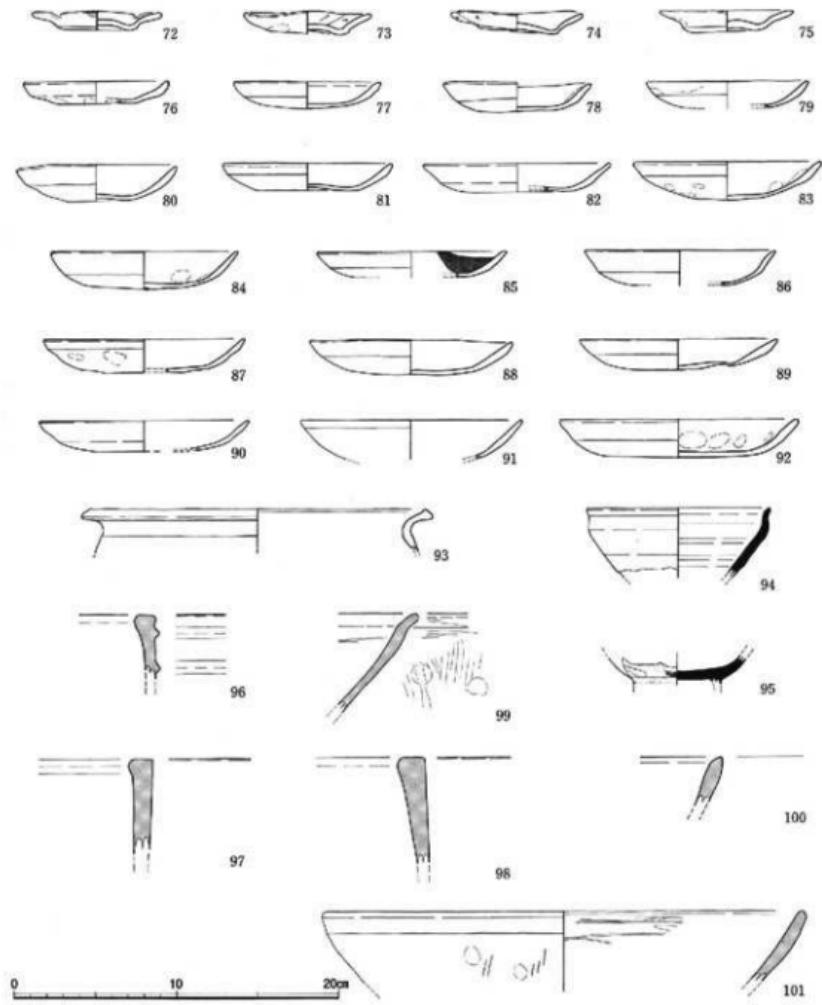


図29 SD-01 3層出土遺物実測図 (S:1/3)

4層出土遺物 102は土師器皿で、底部中央を上げ底にする、いわゆる「へそ皿」である。雲母を含むやや密な胎土を用い、焼成は良好。色調は赤色系である。底部をユビオサエによって成形し、口縁部をヨコナデによって仕上げる。103は土師器皿で、焼成は良好。底部無調整、口縁部をヨコナデで仕上げる。口縁端部には内外面ともに広い範囲で灯芯痕があり、灯明皿として使用されたことが考えられる。

104は土師器羽釜である。残存している部分はほぼヨコナデである。色調は表面が灰白色、断面内部は還元気味に焼成され黒色を呈す。苔原分類の大和I₂型、川口編年Ⅲ-1型式に属し、16世紀後半。

105は中国製磁器染付（青花）碗で景德鎮窯系である。見込に二重圓線を描く。高台側面および底部にも圓線が描かれる。106は瓦質土器羽釜で、口縁部が直線的に立ち上がる。確認できる範囲では外面に2条の沈線を巡らせる。口縁部はヨコナデ。還元焰焼成によって表面は灰白色を呈する。

5層出土遺物 107~115は土師器皿で、107~109は底部中央を上げ底にする、いわゆる「へそ皿」である。いずれも外面底部をユビオサエ、口縁部をヨコナデ、内面をナデによって仕上げ、焼成は良好である。

110は、口縁部を「の」字状にヨコナデする。焼成は良好。111は、底部をユビオサエ、口縁部はやや肥厚させ、ヨコナデする。内外面ともに広い範囲で煤が付着し、灯明皿として使用されたと考えられる。焼成は良好。112は、底部をユビオサエ、口縁部はヨコナデする。焼成は良好。口縁部の一部に煤が付着し、灯明皿としての使用が考えられる。113は、底部をユビオサエ、口縁部はやや肥厚させヨコナデする。焼成は良好。114は底部をユビオサエ、口縁部はナデを施す。焼成は良好。115は外面底部はユビオサエ、口縁部はヨコナデ、内面底部はナデを施す。焼成は良好。

116は、中国製青磁碗で龍泉窯系である。やや粗い胎土で、高台はヘラケズリによって成形される。釉は高台の内側まで掛っているが、疊付部分のふき取りは行われていない。露胎部は酸化焰焼成のため、赤褐色を呈す。見込には、施釉されていてもはっきりと確認できるほど強いナデが施される。また、輪花状の線刻が施され、その中央には円圈内に「太」字を刻出する。117は、瓦質土器小

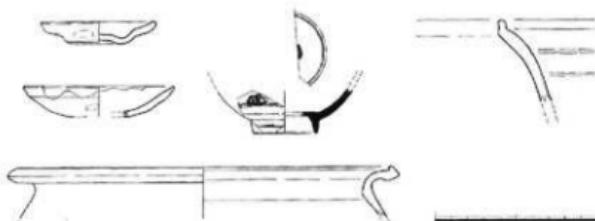


図30 SD-01 4層出土遺物実測図 (S:1/3)

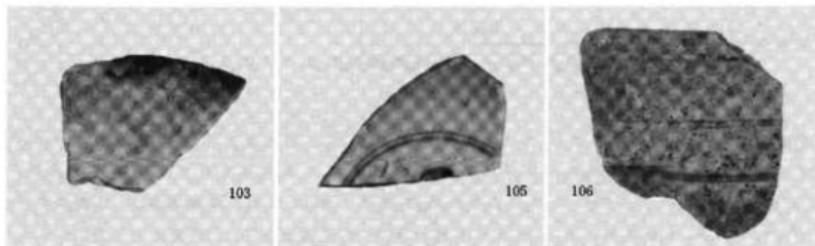


図31 SD-01 4層出土遺物写真

型火鉢。底部に三足がつくと考えられる。内面にはユビオサエの痕跡が認められるものの、ヨコナデによって仕上げる。外面には桜花文のスタンプを押印する。酸化焰焼成によって器壁に煤は吸着せず、淡橙色を呈する。118は瓦質土器火鉢。口縁部はヨコナデで、焼成はやや甘い。

(2) SD-02出土遺物

1層出土遺物 1層から出土した遺物のほとんどが土師器皿の破片であり、実測可能なものは数点であった。119～123は土師器皿である。いずれも、底部はユビオサエが施され、口縁部はヨコナデが施される。119、120の焼成はやや還元気味だが、121～123の焼成は良好である。121は、口縁部に強いナデが施され、段ができる。時期は不明。

2層出土遺物 124は中国製青磁碗。胎土は精良で、黄灰色を呈する。125、126は写真のみの報告である。125は瀬戸・美濃焼陶器である。器種は不明。126は中国製青磁碗で、龍泉窯系である。外面に線刻が施される。また、見込には一重圓線と思われる線刻が施されている。127は東播系須恵器の片口鉢。長石を含みやや密な胎土、ロクロナデによって成形し、口縁は肥厚させる。焼成は

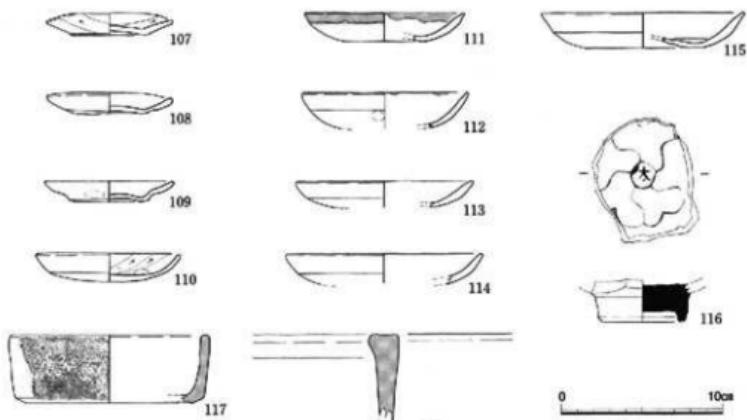


図32 SD-01 5層出土遺物実測図 (S:1/3)

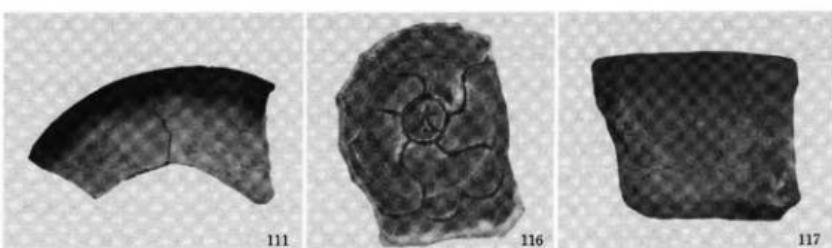


図33 SD-01 5層出土遺物写真

良好。森田編年の第Ⅱ期第2段階（森田稔1995）で、12世紀末葉～13世紀初頭である。他の遺物との年代差が大きいので混入の可能性が高い。128～130は土師器羽釜で、いずれも菅原分類の大和H₃型である。128は体部はタタキ、口縁部と鋸はヨコナデを施す。焼成は良好である。外面には使用時の煤が付着する。129は口縁部をヨコナデする。焼成はやや還元気味である。130は口縁部をヨコナデし、焼成は良好である。131～133は瓦質土器こね鉢と考えられる。131の調整は摩滅により不明である。酸化焰焼成により、にぶい赤橙色を呈する部分と、還元焰焼成により灰色を呈する部分とがある。132は口縁部にヨコナデが施される。焼成は良好である。133は口縁部をユビオサエとハケ、口縁部はヨコナデ、内面はナデが施される。焼成は良好である。133は口縁部をヨコナデする。焼成は良好である。134、135は瓦質土器摺鉢である。134は外面はユビオサエとハケ、口縁部はヨコナデ、内面はナデによって仕上げる。焼成は良好である。近江編年5期、佐藤編年E期で、16世紀前半～16世紀第3四半期。135は、焼成良好で外面はナデ調整が施される。底部には離れ砂が付着している。内面は使用による摩滅により調整は不明である。136、137は瓦質土器深鉢である。いずれも、摩滅により調整は不明だが、焼成は良好である。136は口縁部に2条の突帯が貼り付けられているが、その他にスタンプなどの文様はない。138、139は瓦質土器火鉢である。138は、外面は突帯を貼り付ける際にヨコナデし、口縁部上端と内面はミガキによって仕上げる。突帯の下には四菱文のスタンプを押印する。139は口縁部にヨコナデが施される。内面は表面が摩滅しているため調整は不明である。

これらの遺物より、SD-02・2層は、16世紀前半～16世紀第3四半期の時期觀が与えられ、堀の埋め戻し時期もこの頃と考えられる。

3層出土遺物 140、141は土師器皿である。ともに口縁部をヨコナデし、底部は無調整である。焼成は良好である。142、143は土師器羽釜である。142は菅原分類の大和H₃型である。長石・石英を含む胎土で、調整は摩滅により不明。焼成は良好で、色調は灰白色を呈する。143は菅原分類の大和H₁型で、口縁部をヨコナデによって仕上げる。表面は灰白色を呈するが、断面はやや還元気味の焼成によって灰色を呈する。

144、145は瓦質土器摺鉢である。144は、口縁部をヨコナデし、それ以下をナデによって仕上げる。近江編年4期、佐藤編年D期で、時期は15世紀末～16世紀前半。焼成は良好。145は長石を含むやや粗い胎土で、外面はナデによって仕上げる。内面の調整は摩滅により不明。底部に離れ砂が付着する。焼成は良好で、色調は灰白色。146は、外面にユビオサエ、タタキ、口縁部をヨコナデによって仕上げる。焼成はやや甘く表面・断面ともに灰白色を呈する。近江編年4期、佐藤編年D期で、15世紀末～16世紀前半である。147、148は瓦質土器こね鉢である。147は、外面をユビオサエとナデ、内面をミガキ、口縁部をヨコナデによって仕上げる。焼成は良好で、色調は灰白色を呈する。148は、内面をミガキ、外面はユビオサエのちタタキを施す。底部に離れ砂痕跡を有する。焼成は良好で、色調は灰白色。149～154は瓦質土器深鉢である。149は、内面ユビオサエ、外面はミガキで成形する。焼成は良好で、色調は灰白色。150は、内面と口縁部をヨコナデ、外面をミガキによって仕上げる。焼成は良好で、色調は灰白色。151は、口縁部はヨコナデ。焼成は良好で、色調は

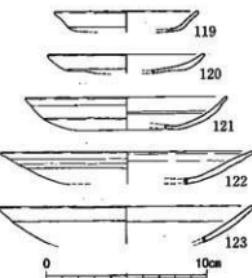


図34 SD-02 1層出土遺物
実測図 (S:1/3)

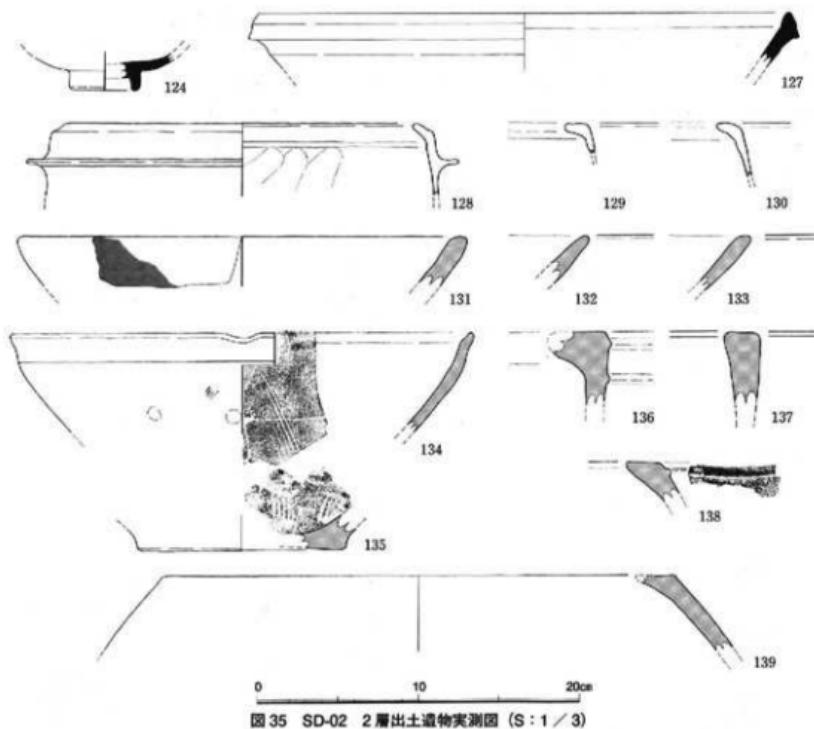


図 35 SD-02 2 層出土遺物実測図 (S : 1 / 3)

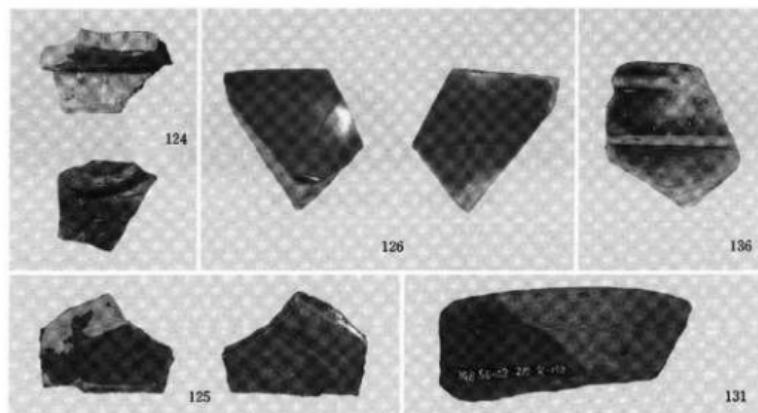


図 36 SD-02 2 層出土遺物写真

灰白色。152は内面はヨコナデ、外面は突帯を貼り付けた後ナデ、口縁部上端はミガキで仕上げる。焼成は良好で、色調は灰白色。153は、内面をヨコナデ、外面は突帯を貼り付けた後ナデ、口縁部上端はミガキで仕上げる。突帯の間は無文である。焼成は良好で、色調は外面黒色を呈する。154の底部は離れ砂痕跡を有し、内面はヨコナデ、外面はケズリである。焼成は良好、色調は灰白色。155は、瓦質土器風炉の脚部であり、内外面ともにヨコナデ。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。

156は東播系須恵器鉢である。ロクロナデによって成形される。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。

157、158は東海系須恵器で、器種はいずれも壺と思われる。157は高台付で、精良な胎土である。ロクロナデによって成形し、外面は回転ヘラケズリによって仕上げる。高台は貼り付けられている。焼成は良好で、色調は内面灰白色、外面灰色、断面は褐灰色を呈する。158は、底部に離れ砂痕跡を有する。内面ロクロナデ、外面ケズリが施される。焼成は良好で、色調は灰白色を呈する。159は備前焼摺鉢である。内面はユビオサエ、外面はナデによって成形する。焼成は良好で、内面は赤灰色、外面にはぶい橙色、断面は灰色を呈する。

これらの遺物より、SD-02・3層には、16世紀前葉の時期觀が与えられよう。また、堀の改修時期もこの時期であろう。

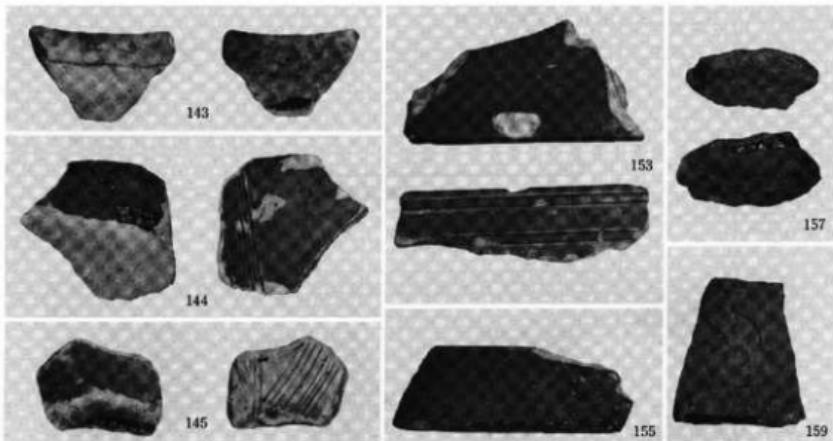


図37 SD-02 3層出土遺物写真

4層出土遺物 160～162は土師器皿である。160は長石・角閃石を含む粗い胎土で、底部をユビオサエ、口縁部をヨコナデによって仕上げる。161は、底部をユビオサエ、口縁部をヨコナデ、内面底部をナデによって仕上げる。焼成は良好。162は、底部をユビオサエ、口縁部をヨコナデ、内面をナアによって仕上げる。焼成は良好。163は土師器羽釜で、口縁部を外側に折り返す菅原分類の大和H₁型。口縁部はヨコナデで仕上げる。焼成はやや還元気味で、色調は外面がにぶい橙色、内面は淡橙色、断面は灰色を呈する。

164は瓦質土器摺鉢である。底部に離れ砂痕跡を有する。外面はナデである。焼成はやや酸化気味で、外面は灰白色を呈する。内面は灰白色だが、一部淡赤褐色を呈する。165は瓦質土器火鉢で、底部は離れ砂痕跡を有する。内面はヨコナデ、外面はケズリ。焼成は良好で、色調は灰色。断面は

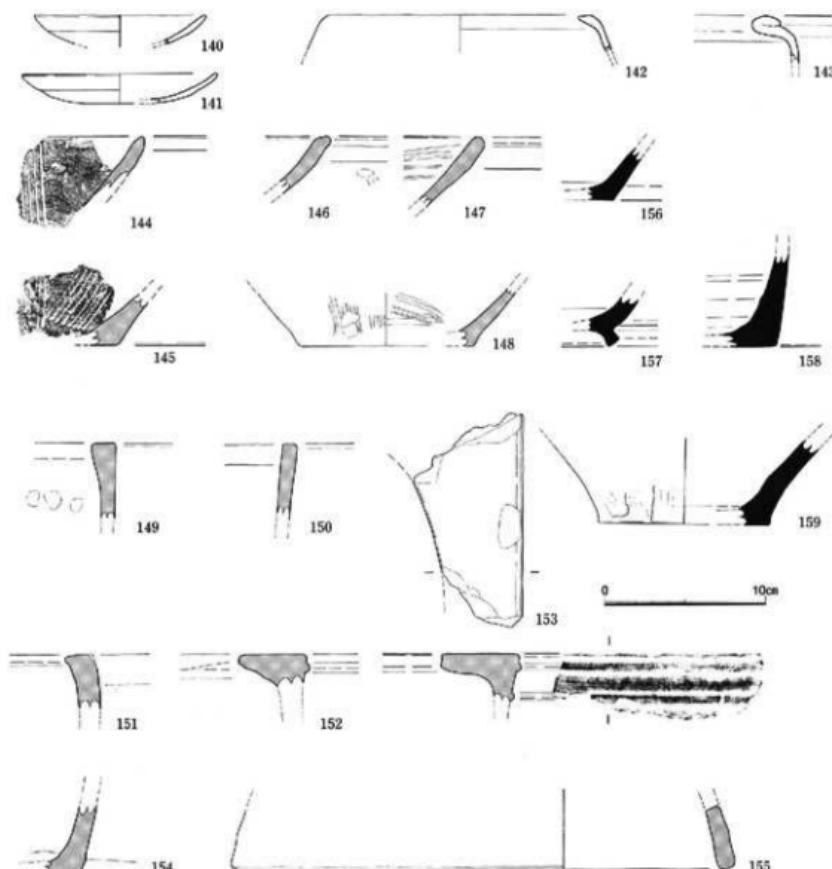


図38 SD-02 3層出土遺物実測図 (S:1/3)

灰白色を呈する。166は瓦質土器深鉢。ユビオサエの後、口縁にヨコナデを施す。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰色で、断面は灰白色を呈する。167は瓦質土器甕と考えられる。底部には離れ砂痕跡を有する。外面はケズリ、内面はナデを施す。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰色で、断面は灰白色を呈する。

明確に時期の決定できる遺物がないため、本遺構の上限は決定できない。

(3) SD-03出土遺物

168~170は土師器皿である。いずれも底部をユビオサエ調整、口縁部をヨコナデ調整する。171は土師器羽釜。焼成は良好。菅原分類の大和H₁型。

172、173は瓦質土器火鉢である。172は、ミガキによって仕上げる。色調は内面が暗灰色、断面が灰白色、外面は灰色を呈する。173は、内面ナデ、外面ミガキ。

以上のように、図化できる遺物が少量であったため、本遺構の明確な時期決定はできない。

(4) 盛土出土遺物

174、175は土師器皿である。いずれも、底部は無調整、口縁部はヨコナデ。焼成は良好。

176は瓦質土器火鉢と考えられる。端部上面はナデ、内外面はミガキを施す。177は瓦質土器で、器種は不明である。調整は摩滅により不明である。178は瓦質土器火鉢の獸脚である。

179は輪の羽口である。外径はおよそ6.0cm、内径はおよそ2.5cmである。色調は被熱した部分は赤褐色もしくは淡橙色を呈するが、それ以外の部分は黄灰色を呈する。

図化できる遺物が少量のため、盛土層の明確な時期決定はできない。

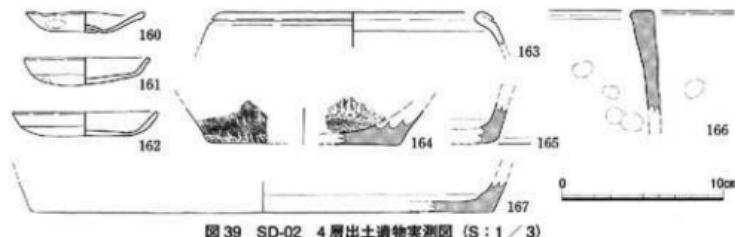


図39 SD-02 4層出土遺物実測図 (S: 1/3)



図40 SD-02 4層出土遺物写真

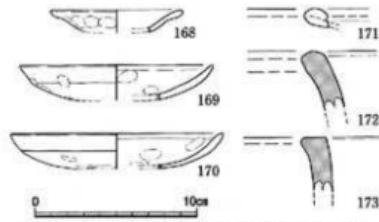


図41 SD-03 1層出土遺物実測図 (S : 1 / 3)

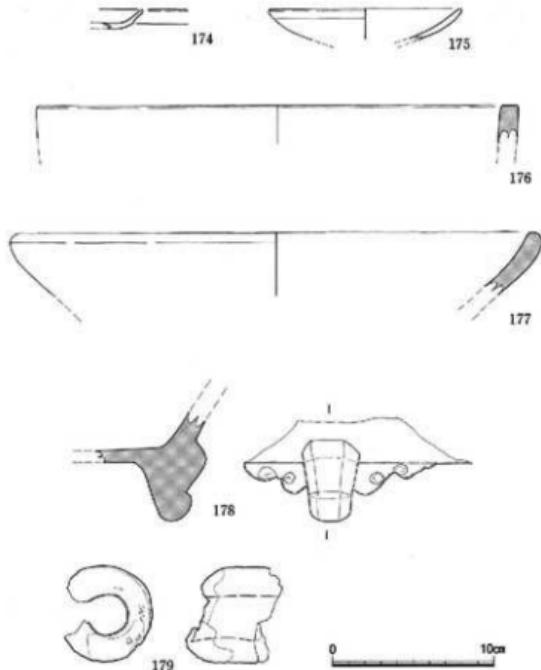


図42 盛土層出土遺物実測図 (S : 1 / 3)

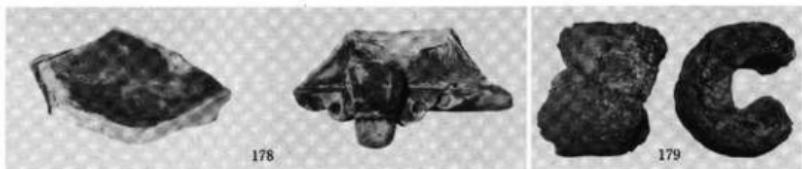


図43 盛土層出土遺物写真

(5) 瓦

SD-01出土瓦 K1、K2、K7、K8は2層、K3～K6、K9～K12は3層から出土した。K1～K3は軒丸瓦、K4～K6は軒平瓦、K7は丸瓦、K8～K12は平瓦である。軒平瓦の瓦当文様はいずれも均等唐草文である。

K1は右三巴文で、長石を含むやや密な胎土である。K2は左三巴文で、胎土は長石・石英を含みやや粗い。焼成はやや甘い。K3は右三巴文で、胎土は長石・石英を多く含みやや粗い。K4は長石・石英・雲母を含むやや密な胎土で、凹面はケズリ、凸面は不定方向のナデを施す。K5は長石・雲母を含むやや粗い胎土で、凹面は横方向の、凸面は縱方向のナデを施す。K6の胎土は長石・石英・雲母を含みやや粗い。凹面、凸面ともにナデを施す。K7は、長石・石英を含む密な胎土である。凹面には布目痕跡、凸面にはミガキが認められる。K8は、長石を含む密な胎土である。凹面はナデ、凸面はケズリ。K9は長石を含むやや粗い胎土で、凹面には吊紐痕跡と布目痕跡、棒状工具によるタタキ痕跡が残る。凸面は縱方向にナデを施す。K10は長石・石英・雲母を含む粗い胎土で、焼成不良。凹面は布目痕跡を有す。凹面はナデを施す。K11は長石・石英・雲母を含むやや粗い胎土で、凹面にケズリ、凸面にナデを施す。K12は長石・雲母・石英を含むやや粗い胎土で、凸面、凹面ともにナデを施す。

SD-02、03出土瓦 K13、K14、K16～K20はSD-02・3層から、K15はSD-03・1層から出土した。K13～K15は丸瓦で、K16～K20は平瓦である。

K13は長石・石英を含むやや粗い胎土で、凹面に布目痕跡、凹面にケズリが認められる。K14は

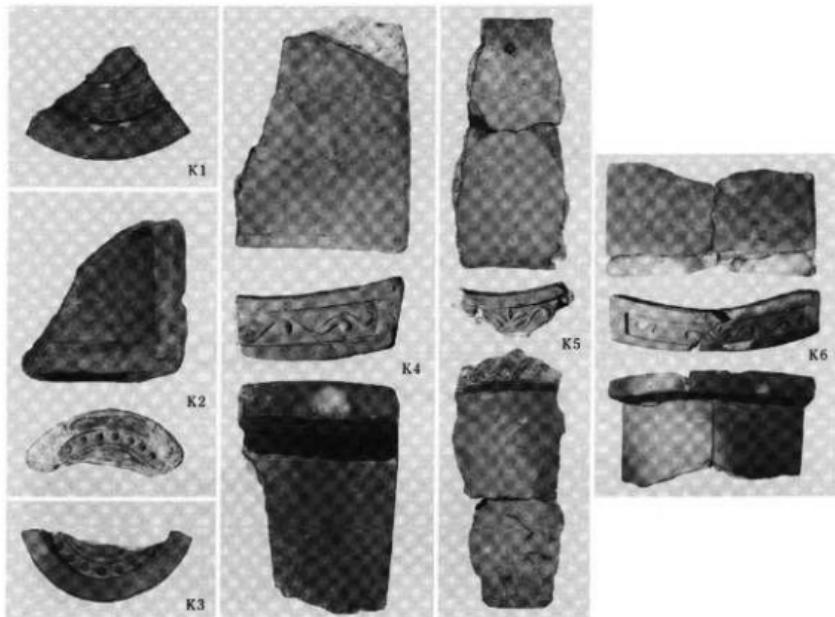


図44 SD-01 出土軒瓦写真

長石・雲母を微量に含む密な胎土で、凹面は布目痕跡、凸面にはケズリが認められる。K15は長石・石英・雲母を少量含むやや密な胎土で、凹面には布目痕跡、タタキ痕跡を有する。凸面にはミガキを施す。K16は長石・石英を含むやや粗い胎土で、凹面はミガキ、凸面はナデを施す。K17は長石・雲母を含むやや粗い胎土で、凹面をミガキ、凸面はナデを施す。焼成は酸化気味である。K18は長石・石英を含むやや粗い胎土で、凹面をミガキ、凸面はナデを施す。K19は長石・石英・雲母を含むやや粗い胎土で、凹面はミガキ、凸面は糸切で仕上げる。K20は長石・石英・雲母を含むやや粗い胎土で、凹面に布目痕跡を有し、凸面は板ナデが施される。

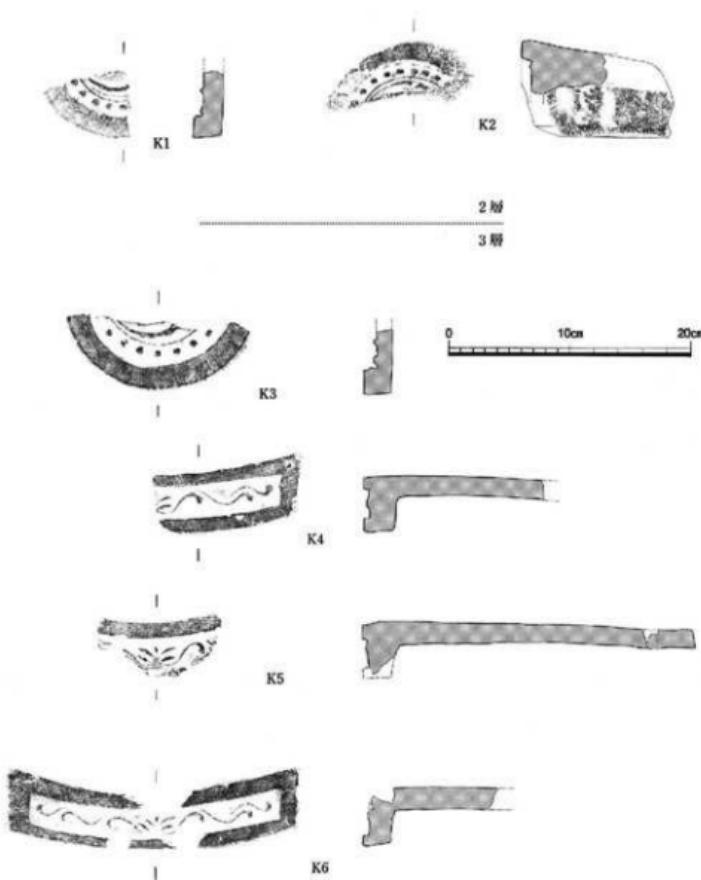


図 45 SD-01 出土軒瓦実測図 (S : 1 / 4)

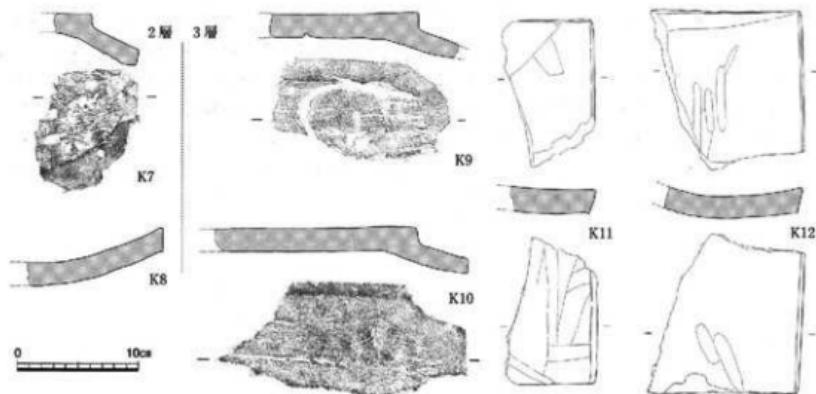


図46 SD-01 出土瓦実測図 (S:1/4)

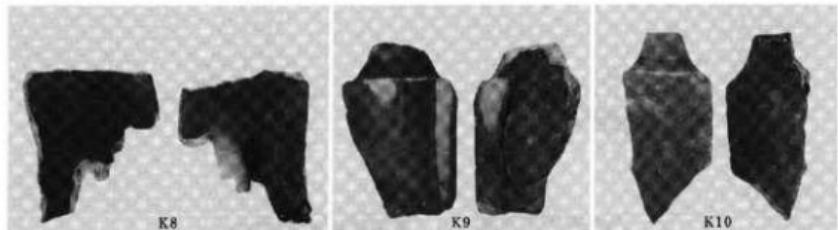


図47 SD-01 出土瓦写真

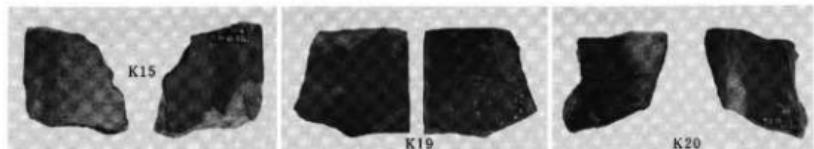


図48 SD-02・03 出土瓦写真

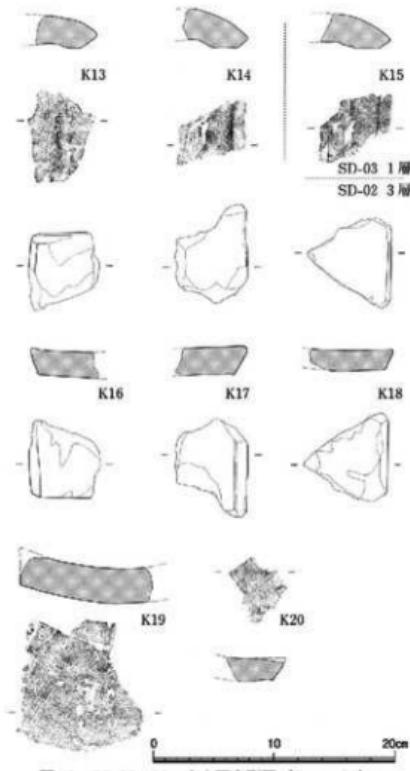


図49 SD-02・03 出土瓦実測図 (S : 1 / 4)

(6) 金屬製品

M1はSD-01・2層、M2はSD-01・3層より出土した鉄砲玉である。共に鉛製で、白色化している。

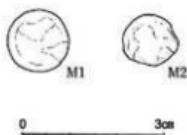


図50 出土鉄砲玉実測図
(S : 1 / 1)

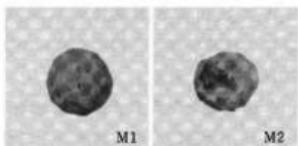


図51 出土鉄砲玉写真

III まとめ

今回の発掘調査で、新旧二時期にわたる南北方向の堀が検出された。古段階の堀（SD-02）は、その掘削時期は明確ではないが、改修時期は16世紀前葉であり、これが人為的に埋戻されるのは16世紀第3四半期である。次いで、南端が北へ約9m移動する形で、幅を倍とする（8m→16m）新段階の堀が掘られる（SD-01）。時期は、SD-02が埋戻された直後であるが、しかしそれは掘削後間をおかずには、深さにして半分以上埋戻されてしまう。また、この浅くなった堀も、16世紀第4四半期には完全に埋戻された。

なお、今回の調査では東西方向の堀も北端部分が検出されており、その堆積層も大きく二時期に分かれることから、それらは南北方向の古段階と新段階の堀にそれぞれ対応する可能性がある。この場合、新段階の南北方向の堀と東西方向の堀の間には約11mの陸橋状の空間が生じるが（古段階の南北方向の堀と東西方向の堀の空間は約2m）、土層の観察から、ここには土塁が築造されていた可能性が高い。

以上のように、今回の調査では16世紀第3四半期における堀の大規模化と土塁の築造、すなわち防御能力の拡張が看取されたのであるが、その要因としては、SD-01より出土した鉄砲玉2点が重要な意味を持つものと思われる。筒井城は、永禄2年（1559）8月、河内方面から侵攻した松永久秀の攻撃を受けて、わずか一日で落城する（『享禄天文記』）（金松2004）。以前、筒井城第5次調査の報告でも触れたように（大和郡山市教育委員会2004）、内堀から出土した鉄砲玉はこの時の戦闘において、松永軍が使用したものである可能性が高い。逆にいえば、堀の大規模化などは筒井方の鉄砲に対する備えと見られる。

しかしながら、前述の通りこの戦闘に際し、筒井城はわずか一日で落城する。SD-01において見られた整地土を伴う埋戻しは、この後にあまり時間をおかずに行われたものと思われ、またその際に多量の土師皿を用いた祭祀が行われているが、これは堀の埋戻し（破城）に伴う松永方の行為と想定される。なお、このSD-01は16世紀第4四半期に完全に埋戻されるが、これは天正8年（1580）の織田信長によるいわゆる「大和一国破城令」を背景に考えるべきであろう。

以上のように、今回の調査は中世的平城が鉄砲という新兵器の前に無力であったこと、それが郡山城という近代的城郭（織豊系城郭）に止揚されねばならなかつた要因を明確に示したものといえよう。なお、その詳細については以前別稿を作成したが（山川2006）、今回、報告書作成に際して遺物の詳細な観察・図化を行った結果、年代観などに若干訂正を加えた。本書と併せて参照いただければ幸甚である。

今回の調査や第5次調査の成果により、筒井城内堀の変遷過程はかなり明確になってきたものといえる。今後は内堀に囲まれた空間内部の調査や、内堀と連動して掘削や規模の拡大がなされたと想定される外堀の調査を鋭意進めて行く必要があるだろう。

【参考文献】

- 近江俊彦 1994「大和瓦質指鉢考」『由良大和古代文化研究協会研究紀要』2
- 金松 誠 2004「筒井城の歴史」『筒井城総合調査報告書』大和郡市教育委員会・城郭談話会
- 川口宏海 1990「16世紀における大和型土釜の動向」『中近世土器の基礎的研究』VI
- 佐藤亜聖 1996「大和における瓦質土器の展開と変遷」『中近世土器の基礎的研究』XII
- 菅原正明 1983「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』
- 高田 徹 2004「筒井城の縄張りに関する基礎的検討」『筒井城総合調査報告書』
大和郡市教育委員会・城郭談話会
- 中野晴久 1995「常滑・渥美」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- 藤澤良祐 2007「瀬戸大窯の時代」『愛知県史』別編産業2、愛知県史編さん委員会
- 松澤 修 2004「緊急雇用創出特別対策事業に伴う出土文化財資料化収納業務報告書I」
- 村田修三 1980「筒井城」『日本城郭大系10』新人物往来社
- 森田 勉 1982「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』2号
- 森田 稔 1995「中世須恵器」『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- 山川 均 1995「郡山城出土の軒瓦について」『畿豊城郭』第2号
1996「筒井城に関する復原的研究」『関西近世考古学研究』IV
- 大和郡市教育委員会 2004「筒井城第5次発掘調査報告書」

No.	出土地	器種名	計測値(cm)	胎土	色調	備考
1		土師器皿	口(7.6) 高(1.3)	長石少量含む	灰白 (10YR8/2)	白色系、へそ皿
2		土師器皿	口(8.1) 高(1.4)	雲母少量含む	灰白 (10YR8/2)	白色系、へそ皿
3		土師器皿	口(7.6) 高(1.4)	長石、雲母少量含む	浅黄橙 (7.5YR8/4)	白色系、へそ皿
4		土師器皿	口(8.2) 高(1.3)	石英、雲母少量含む	にぶい橙 (7.5YR7/4)	赤色系、へそ皿
5		土師器皿	口(7.8) 高(1.2)	石英、長石、雲母少量含む	にぶい橙 (7.5YR7/4)	赤色系、へそ皿
6		土師器皿	口(7.6) 高(1.4)	雲母少量含む	にぶい橙 (10YR7/4)	赤色系、へそ皿
7		土師器皿	口(8.1) 高(1.3)	雲母少量含む	にぶい橙 (7.5YR7/4)	赤色系、へそ皿
8		土師器皿	口(8.0) 高(1.3)	長石、雲母含む	にぶい橙 (7.5YR7/4)	赤色系、へそ皿
9		土師器皿	復口(9.8)	鈍母少量含む	灰白 (10YR8/2)	白色系
10		土師器皿	復口(11.6) 高(2.5)	鈍母少量含む	灰白 (10YR8/2)	白色系
11		土師器皿	復口(11.8) 高(2.2)	雲母、石英少量含む	灰白 (10YR8/2)	白色系
12		土師器皿	復口(12.8)	石英、雲母少量含む	にぶい黄橙 (10YR7/3)	白色系、口縁部に焼付青
13		土師器皿	復口(12.2) 高(2.2)	雲母少量含む	浅黄橙 (10YR8/3)	白色系、口縁部に焼付青
14		土師器皿	復口(15.8) 高(2.5)	石英、雲母含む	浅黄橙 (10YR8/3)	白色系、底部黒色化
15		土師器皿	復口(17.0)	長石、雲母含む	浅黄橙 (10YR8/4)	大和I・II・III-1型式
16		土師器皿	復口(19.6)	長石、雲母少量含む	浅黄橙 (10YR8/4)	大和I・II・III-1型式
17	SD-01	土師器皿	復口(21.2)	長石、石英、雲母少量含む	灰白 (10YR8/2)	大和I・II・III-1型式
18	1層	陶器九三	口(10.8) 高(2.7) 底(6.0)		[瓶] 灰白 (2.5YB1/1) [胎] 灰白 (7.5Y7/2)	溝戸・美濃・階付 大和磨3段階後手
19		信楽押鉢		長石、石英多く含む	にぶい赤褐 (5YR5/3)	松津縄乍1期 押4条/単位
20		瓦質土器香炉	復口(7.6) 高(5.0) 底(8.8)	長石、石英多く含む	暗灰 (N3/0) [断] 灰白 (10YR8/1)	
21		瓦質土器指鉢		長石、石英、雲母含む	灰 (N4/0) [断] 灰白 (2.5YB1/1)	
22		瓦質土器こね鉢	復口(30.8)	石英、チャート含む	灰 (N4/0) [瓶] 灰白 (10YR8/2)	
23		瓦質土器風炉	復口(27.8)	長石、石英、鈍母含む	黑 (SY2/1) [断] 浅黄橙 (10YR8/3)	内面の燒し吸着が甘い
24		瓦質土器深鉢		長石、石英、チャート含む	灰 (N5/0) [断] 灰白 (2.5YB1/1)	
25		中国製磁器柴付皿	復口(10.8) 高(2.4) 復底(6.4)			
26		中国製磁器柴付皿	口(10.2) 高(2.4) 底(5.0)			景徳鎮・緋龍文 高台に記号「+」
27		中国製白磁皿	復口(13.8) 高(3.5) 復底(7.8)			
28		土師器皿	口(8.4) 高(1.5)	長石、石英、鈍母含む	にぶい橙 (7.5YR7/4)	赤色系、へそ皿
29		土師器皿	口(8.6) 高(1.3)	長石、石英、鈍母含む	浅黄橙 (7.5YR8/6)	赤色系、へそ皿
30		土師器皿	口(7.8) 高(1.2)	長石、石英、鈍母含む	橙 (7.5YR7/6)	赤色系、へそ皿
31		土師器皿	口(8.1) 高(1.6)	長石、石英、鈍母含む	橙 (7.5YR7/6)	赤色系、へそ皿
32		土師器皿	口(8.2) 高(1.4)	長石、石英、鈍母含む	橙 (7.5YR7/6)	赤色系、へそ皿
33		土師器皿	口(8.3) 高(1.4)	長石、石英、鈍母含む	橙 (7.5YR7/4)	赤色系、へそ皿
34		土師器皿	口(8.0) 高(1.4)	長石、石英、鈍母含む	橙 (7.5YR7/4)	赤色系、へそ皿
35		土師器皿	口(7.8) 高(1.6)	長石、石英、鈍母含む	橙 (7.5YR7/6)	赤色系、へそ皿
36		土師器皿	口(8.1) 高(1.4)	長石、石英、鈍母含む	橙 (7.5YR7/6)	赤色系、へそ皿
37		土師器皿	口(8.0) 高(1.5)	長石、石英、鈍母含む	橙 (7.5YR7/4)	赤色系、へそ皿
38		土師器皿	口(8.4) 高(1.4)	長石、石英、鈍母含む	にぶい橙 (7.5YR7/4)	赤色系、へそ皿 口縁部スズ付青
39	SD-01	土師器皿	口(8.2) 高(1.3)	長石、石英、雲母含む	橙 (7.5YR7/6)	赤色系、へそ皿
40	2層	土師器皿	口(7.8) 高(1.4)	長石、石英、雲母含む	橙 (7.5YR7/6)	赤色系、へそ皿
41		土師器皿	口(8.1) 高(1.4)	長石、石英、雲母含む	橙 (7.5YR7/6)	赤色系、へそ皿
42		土師器皿	口(8.2) 高(1.8)	長石、石英、雲母含む	にぶい橙 (7.5YR7/4)	赤色系、へそ皿
43		土師器皿	口(8.1) 高(1.5)	長石、石英、雲母含む	灰黄 (2.5Y7/2)	白色系、へそ皿
44		土師器皿	口(8.6) 高(1.7)	長石、石英、雲母含む	浅黄橙 (10YR8/3)	白色系、口縁部スズ付青
45		土師器皿	口(9.0) 高(2.1)	長石、石英、雲母含む	浅黄橙 (10YR8/3)	白色系
46		土師器皿	口(9.1) 高(1.8)	長石、石英、雲母含む	浅黄橙 (10YR8/3)	白色系
47		土師器皿	口(9.2) 高(1.9)	長石、石英、雲母含む	浅黄橙 (10YR8/4)	白色系
48		土師器皿	口(10.0) 高(1.7)	長石、石英、雲母含む	浅黄橙 (10YR8/3)	白色系
49		土師器皿	口(9.8) 高(2.0)	長石、石英、雲母含む	浅黄橙 (10YR8/3)	白色系
50		土師器皿	口(10.2) 高(1.9)	長石、石英、雲母含む	浅黄橙 (10YR8/2)	白色系
51		土師器皿	口(10.7) 高(1.9)	長石、石英、雲母含む	浅黄橙 (10YR8/3)	白色系、口縁部スズ付青
52		土師器皿	復口(11.2) 高(1.8)	長石、石英、雲母含む	浅黄橙 (10YR8/3)	白色系

表 1 出土遺物観察表①

No.	出土地	器種名	計測値(cm)	胎土	色調	備考
53		土師器皿	復口(11.6)	長石、石英、雲母含む	浅黄橙(10YR8/4)	白色系
54		土師器皿	復口(12.2) 高(2.0)	長石、石英、雲母含む	浅黄橙(10YR8/3)	白色系、口縁部スス付着
55		土師器皿	口(11.6) 高(2.3)	長石、石英、雲母含む	灰白(10YR8/2)	白色系
56		土師器皿	口(12.1) 高(2.0)	長石、石英、雲母含む	浅黄橙(10YR8/3)	白色系
57		土師器皿	口(15.4) 高(2.3)	長石、石英、雲母含む	浅黄橙(10YR8/4)	白色系 底部還元焼成の為黒色を呈す
58		土師器羽釜	復口(19.3)	長石、石英、雲母含む	浅黄橙(10YR8/3)	大和 I ₂ 型、II-1型式
59		土師器羽釜	復口(20.2)	長石、石英、雲母含む	浅黄橙(7.5YR8/3)	大和 I ₂ 型、II-1型式
60		土師器羽釜	復口(21.6)	長石、石英、雲母含む	浅黄橙(7.5YR8/3)	大和 I ₂ 型、II-1型式
61		土師器羽釜	復口(20.4)	長石、石英、雲母含む	浅黄橙(7.5YR8/3)	大和 I ₂ 型、II-1型式
62		土師器羽釜	復口(20.4)	長石、石英、雲母含む	浅黄橙(7.5YR8/4)	大和 I ₂ 型、II-1型式
63		中國製白磁罐			白色	
64	2層	中國製染付磁器皿				断面全体に漆付着
65		中國製染付磁器皿	復底(3.4)			茜雑斑、断面の一部に漆付着
66		中國製染付磁器皿	復底(5.5)			景徳鎮系
67		土製円盤	長(3.4) 幅(3.0) 厚(0.8)	雲母含む	灰(N4/0) 【断】灰白(2.5Y8/1)	瓦質土器
68		瓦質土器管	復口(15.6)	長石、雲母やや多く含む	暗灰(N3/0) 【断】灰白(2.5Y8/2)	
69		瓦質土器管	復底(21.0)	長石、チャート多く含む	【外】灰白(5Y7/1) 【内】灰(N4/0) 【断】灰白(2.5Y8/1)	
70		瓦質土器浅鉢	復口(31.8)	長石、石英、雲母含む	【外】暗灰(N3/0) 【内】黄灰(2.5Y6/1) 【断】灰白(2.5Y8/2)	
71		陶器甕				常滑窯、中野綱半 6a 型式
72		土師器皿	復口(7.8) 高(1.2)	石英、雲母含む	浅黄橙(10YR8/3)	白色系、へそ凹、灯明皿
73		土師器皿	口(7.8) 高(1.4)	長石、石英、雲母含む	橙(7.5YR8/6)	赤色系、へそ凹
74		土師器皿	口(8.0) 高(1.5)	長石、石英、雲母含む	灰白(10YR8/2)	白色系、へそ凹
75		土師器皿	口(8.1) 高(1.3)	長石、石英、雲母含む	浅黄橙(7.5YR8/6)	白色系、へそ凹
76		土師器皿	口(8.8) 高(1.4)	長石、石英、雲母含む	灰白(10YR8/2)	白色系
77		土師器皿	復口(9.0) 高(1.7)	長石、石英、雲母含む	浅黄橙(10YR8/3)	白色系
78		土師器皿	口(9.0) 高(1.8)	長石、石英、雲母含む	灰白(10YR8/2)	白色系
79		土師器皿	復口(9.8) 高(1.7)	長石、雲母含む	灰白(10YR8/2)	白色系
80		土師器皿	復口(9.8) 高(2.1)	長石、石英、雲母含む	灰白(10YR8/2)	白色系
81		土師器皿	復口(10.4) 高(1.7)	長石、石英、雲母含む	灰白(10YR8/3)	白色系
82		土師器皿	復口(11.4) 高(1.75)	長石、石英、雲母含む	灰白(10YR8/2)	白色系
83		土師器皿	復口(11.4) 高(2.4)	長石、石英、雲母含む	灰白(10YR8/2)	白色系
84		土師器皿	口(11.5) 高(2.4)	長石、石英、雲母含む	灰白(10YR8/2)	白色系
85		土師器皿	復口(11.6) 高(1.6)	石英、雲母含む	灰白(10YR7/1)	白色系
86		土師器皿	復口(11.6) 高(2.2)	石英、雲母含む	灰白(10YR8/2)	白色系
87		土師器皿	復口(12.3) 高(2.1)	長石、雲母含む	灰白(10YR8/3)	白色系
88	3層	土師器皿	復口(12.4) 高(2.2)	長石、石英、雲母含む	灰白(10YR8/2)	白色系
89		土師器皿	復口(12.2) 高(1.95)	長石、雲母少々含む	灰白(10YR8/2)	白色系
90		土師器皿	復口(12.6)	長石、石英少々含む	灰白(10YR8/2)	白色系
91		土師器皿	復口(13.6)	長石、石英、雲母含む	灰白(10YR8/2)	白色系
92		土師器皿	復口(14.6) 高(2.4)	長石、石英、雲母含む	浅黄橙(10YR8/3)	体部内外面に炭素吸着
93		土師器羽釜	復口(20.8)	長石、石英をやや多く含む	浅黄橙(10YR8/3)	難元結燒成による黒色を呈す
94		天日茶碗	復口(11.2)		【胎】黑(7.5YR1.7/1) 【断】橙(7.5YR7/6)	瀬戸・美濃、鉄胎 大窯第2段階後半
95		中國製染付磁器皿				景德鎮系 底部見込みに一重織紋
96		瓦質土器火鉢		長石、石英多く含む	浅黄橙(10YR8/4) 【断】橙(2.5YR7/8)	還元不十分
97		瓦質土器火鉢		長石、石英多く含む	暗灰(N3/0) 【断】灰白(5Y8/1)	
98		瓦質土器火鉢		長石、石英含む	灰(N4/0) 【断】灰白(2.5Y8/1)	
99		瓦質土器溜鉢		長石、石英含む	灰(N5/0) 【断】灰白(5Y8/1)	

表2 出土遺物観察表②

No.	出土地	器種名	計測値(cm)	胎土	色調	備考
100	SD-01 3層	瓦質土器招鉢		長石、石英含む	暗灰(N3/0) [断]灰白(10YR8/1)	
101		瓦質土器こね鉢		長石、石英含む	灰(N4/0) [断]灰白(5Y8/1)	
102		土師器皿	復口(7.0) 高(1.4) 復底(3.2)	長石、石英、雲母含む	橙(7.5YR7/6)	
103	SD-01 4層	土師器皿	復口(9.2) 高(1.9)	長石、石英、雲母含む	淡黄(2.5Y8/3)	口縁部にスス付着
104		土師器羽釜		長石、石英含む	灰白(10YR8/1)	
105		中國製青磁碗				
106		瓦質土器羽釜		長石、石英、雲母含む	灰白(5Y7/1) [断]灰白(5Y8/1)	
107	SD-01 5層	土師器皿	復口(7.6) 高(1.4) 復底(4.4)	長石、石英含む	浅黄橙(10YR8/3)	白色系、へそ組
108		土師器皿	口(7.8) 高(1.3) 底(3.9)	長石、石英含む	浅黄橙(10YR8/3)	白色系、へそ組
109		土師器皿	復口(7.8) 高(1.3) 復底(4.0)	長石、石英、雲母含む	浅黄橙(10YR8/3)	白色系、へそ組
110		土師器皿	口(9.0) 高(1.8)	長石、石英、雲母含む	灰白(2.5Y8/2)	白色系
111		土師器皿	復口(9.9) 高(1.8)	雲母含む	灰白(2.5Y8/2)	白色系、口縁部スス付着
112		土師器皿	復口(10.2)	石英、雲母含む	浅黄橙(10YR8/3)	白色系、口縁部スス付着
113		土師器皿	復口(10.8)	長石、石英、雲母含む	灰白(10YR8/2)	白色系
114		土師器皿	復口(12.0)	石英、雲母含む	灰白(10YR8/2)	白色系
115		土師器皿	復口(12.6) 高(2.2) 復底(7.2)	長石、石英、雲母含む	灰白(2.5Y8/2)	白色系、上げ底
116		中國製青磁碗	底(2.8)		[輪]オリーブ灰(2.5GY6/1) [胎]灰白(N8/0)	痕跡無系、見込み「太」字線刻
117	SD-02 1層	瓦質土器小型火鉢		長石、石英、雲母含む	淡橙(5Y8/4)	透光不十分、板文又スタンプ
118		瓦質土器火鉢		長石、石英、雲母含む	暗灰(N3/0) [断]灰白(5Y8/1)	
119		土師器皿	復口(8.8)	長石、雲母含む	浅黄橙(10YR8/4)	
120	SD-02 2層	土師器皿	復口(9.6)	長石、雲母含む	淡橙(5Y8/4)	
121		土師器皿	復口(12.4) 高(2.1) 復底(5.8)	長石、石英、雲母含む	浅黄橙(10YR8/3)	
122		土師器皿	復口(15.6)	長石、石英、雲母含む	浅黄橙(10YR8/4)	
123		土師器皿	復口(15.6)	長石、石英、雲母含む	浅黄橙(10YR8/4)	
124		中國製青磁碗	復底(3.6)		[輪]オリーブ灰(10Y5/2) [胎]灰白(N7/0)	
125	南蕃				[輪]オリーブ灰(7.5Y6/3) [胎]灰白(7.5Y7/1)	写真のみ
126		中國製青磁碗			[輪]明緑灰(7.5GY7/1) [胎]灰白(N8/0)	写真のみ
127		須恵器鉢	復口(33.0)	長石、石英含む	オリーブ灰(5GY6/1)	東播系
128	土師器皿	復口(21.0)		長石、石英、雲母、チャート含む	にぶい橙(5YR7/4)	外縁にスス付着
129		土師器羽釜				大和 H ₂ 型
130		土師器羽釜				大和 H ₃ 型
131	SD-02 2層	瓦質土器こね鉢	復口(27.4)	長石、石英含む	赤橙(10R6/8)	一部透光焼成により褐色 炭素吸着不十分、器種不明
132		瓦質土器こね鉢		長石、石英含む	灰(N4/0) [断]灰白(5Y8/1)	
133		瓦質土器こね鉢		長石、石英含む	灰(N4/0) [断]灰白(2.5Y8/1)	
134	瓦質土器招鉢	復口(28.4)		長石、石英、雲母含む	灰(N5/0) [断]灰白(2.5Y8/1)	指目 6 条
135		瓦質土器招鉢	復底(12.2)	長石、石英、雲母含む	灰(N4/0) [断]淡黄(2.5Y7/4)	
136		瓦質土器深鉢		長石、石英、雲母含む	灰(SY4/1) [断]淡黄(2.5Y8/4)	
137	瓦質土器深鉢			長石、石英、雲母含む	灰(N4/0) [断]にぶい黄橙(10YR7/4)	
138		瓦質土器火鉢		石英、雲母含む	灰(N5/0) [外]灰(N5/0) [内]にぶい黄橙(10YR7/3)	
139		瓦質土器火鉢	復口(31.6)	長石、石英、雲母含む	[断]暗灰(N8/0)	
140	SD-02	土師器皿	復口(10.6)	長石、雲母少量含む	にぶい橙(10YR7/3)	
141	3層	土師器皿	復口(12.0) 高(2.0) 復底(5.6)	雲母微量含む	浅黄橙(10YR8/3)	

表 3 出土遺物観察表③

No.	出土地	器種名	計測値 (cm)	胎土	色調	備考
142		土師器羽釜	復口(14.6)	長石、石英含む	灰白 (10YR8/2)	大和 H ₂ 型
143		土師器羽釜		長石、石英非常に多く含む	灰白 (10YR8/2)	大和 H ₂ 型
144		瓦質土器指鉢		長石、石英若干含む	灰 (N4/0) [断] 灰 (N6/0)	佐藤編年 D期
145		瓦質土器指鉢		長石含む	灰 (N4/0) [断] 灰白 (N8/0)	
146		瓦質土器指鉢		石英含む	[外]、[断] 灰白 (2.5Y8/1) [内] 番灰 (N3/0)	
147		瓦質土器こね鉢		長石、雲母含む	灰 (N5/0) [断] 灰白 (10YR8/2)	
148		瓦質土器指鉢	復底(10.8)	長石、石英含む	灰 (N4/0) [断] 灰 (10YR8/1)	
149		瓦質土器深鉢		長石、石英、雲母含む	灰 (N4/0) [断] 灰白 (2.5Y8/1)	
150		瓦質土器深鉢		長石、雲母含む	暗灰 (N3/0) [断] 灰白 (5Y7/1)	
151	SD-02 3層	瓦質土器深鉢		長石、石英、雲母含む	灰 (N5/0) [断] 灰白 (5Y8/1)	
152		瓦質土器深鉢		雲母含む	暗灰 (N3/0) [断] 灰白 (2.5Y8/1)	
153		瓦質土器深鉢		長石、雲母含む	暗灰 (N3/0) [断] 灰白 (2.5Y8/1)	
154		瓦質土器深鉢		長石、雲母含む	暗灰 (N3/0) [断] 灰白 (5Y8/1)	
155		瓦質土器風炉	復底(29.6)	雲母含む	暗灰 (N3/0) [断] 灰白 (2.5Y8/1)	脚部のみ残存
156		須恵器鉢		長石、石英、雲母含む	灰 (N5/0) [断] 灰白 (5Y8/1)	東晉系
157		須恵器壺		長石含む	灰 (N4/0) [断] 暗灰 (10YR6/1)	東晉系
158		須恵器壺		長石、雲母含む	灰白 (10YR7/1) [外] にぶい橙 (2.5YR5/1)	東晉系
159		陶器指鉢		長石、石英、雲母微量含む	[内] 赤灰 (2.5YR5/1) [断] 灰 (N4/0)	備前焼
160	SD-02 4層	土師器皿	口(7.4) 高(1.3) 底(3.1)	長石、石英含む	にぶい黄橙 (10YR7/2)	~そ皿
161		土師器皿	口(7.8) 高(1.7)	長石若干含む	灰白 (10YR8/1)	
162		土師器皿	復口(8.8) 高(1.5)	雲母少量含む	にぶい黄橙 (10YR7/3)	
163		土師器羽釜	復口(16.0)	長石、石英、雲母含む	にぶい黄橙 (5YR7/4)	大和 H ₂ 型
164	SD-02 4層	瓦質土器指鉢	復底(11.5)	長石、雲母含む	灰 (N6/0) [断] 灰白 (10YR8/1)	
165		瓦質土器火鉢		長石、石英含む	灰 (N6/0) [断] 灰白 (10YR8/2)	
166		瓦質土器深鉢		長石含む	灰 (N4/0) [断] 灰白 (2.5Y8/1)	
167		瓦質土器壺	復底(28.4)	石英、チャート含む	灰 (N6/0) [断] 灰白 (2.5Y8/1)	
168	SD-03 1層	土師器皿	復口(8.0)	長石、石英含む	浅黄橙 (7.5YR8/6)	
169		土師器皿	復口(11.8)	長石、石英、雲母少量含む	浅黄橙 (10YR8/3)	
170		土師器皿	復口(13.0)	長石、雲母含む	浅黄橙 (10YR8/3)	
171	SD-03 1層	土師器羽釜		長石、石英含む	浅黄橙 (10YR8/3)	
172		瓦質土器火鉢		雲母含む	灰 (N4/0) [断] 灰白 (N8/0)	
173		瓦質土器火鉢		長石、石英含む	灰 (N5/0) [断] 灰白 (5Y8/1)	
174	底土層	土師器皿		長石、雲母含む	浅黄橙 (10YR8/4)	
175		土師器皿	復口(11.8)	長石含む	浅黄橙 (10YR8/4)	
176		瓦質土器火鉢	復口(28.0)	雲母、チャート、角閃石含む	浅黄橙 (10YR8/3)	一部黒色を呈す、器種不明
177		瓦質土器	復口(31.6)	長石、石英、雲母、チャート含む	浅黄橙 (10YR8/4)	器種不明
178		瓦質土器火鉢		長石、石英含む	灰 (N4/0) [断] 灰白 (2.5Y8/2)	
179		ふいご洞口		長石、石英含む	[外] 赤灰 (2.5YR6/1) [内] 赤褐 (10R5/4)	

表4 出土遺物観察表④

No.	出土地	瓦当文様	色調	瓦当残存率	計測値 (mm)			備考
					直径	内径	外縁幅	
K1	SD-01 2層	右三巴文 左三巴文	灰白 (2.5Y8/1) 灰白 (7.5Y7/1)	15%	136	—	15	6
K2	SD-01 3層	右三巴文	灰白 (5Y8/1)	10%	154	—	15	9
K3	SD-01 3層	右三巴文	灰白 (5Y8/1)	30%	154	—	19	11

表5 軒丸瓦観察表

No.	出土地	瓦当文様	色調	瓦当残存率	計測値 (mm)			備考
					瓦当厚	上弦幅	下弦幅	
K4	均整唐草文	灰白 (2.5Y8/1)	50%	—	—	—	—	
K5	SD-01 3層	均整唐草文	灰 (N5/0)	20%	—	—	—	
K6	均整唐草文	灰白 (5Y8/1)	90%	47	236	233	—	

表6 軒平瓦観察表

No.	出土地	計測値 (mm)		調整		色調	備考
		玉縁長	厚さ	凸面	凹面		
K7	SD-01 2層	40	16	ミガキ	布目	灰白 (2.5Y8/1)	
K9	SD-01	19	ナデ	糸あり	灰白 (2.5Y8/1)	吊り紐痕あり	
K10	3層	40	20	ナデ	布目	灰白 (10YR8/2)	焼成不良
K13	SD-02	—	24	ミガキ	布目	灰 (N6/0)	
K14	3層	—	25	ミガキ	布目	灰 (N6/0)	
K15	SD-03 1層	—	24	ミガキ	布目	淡黄 (2.5Y8/3)	

表7 丸瓦観察表

No.	出土地	計測値 (mm)		調整		色調	備考
		厚さ	凸面	凹面			
K8	SD-01 2層	19	ケズリ	ナデ	灰白 (N8/0)		
K11	SD-01	20	ナデ	ケズリ	灰白 (2.5Y8/1)		
K12	3層	19	ナデ	ナデ	灰白 (5Y8/1)		
K16	SD-02	22	ナデ	ミガキ	灰 (5Y6/1)		
K17	SD-02 3層	23	ナデ	ミガキ	凹面：橙 (2.5YR7/8) 凸面：褐灰 (10YR6/1)	全体に酸化施焼成	
K18		17	ナデ	ミガキ	灰 (N5/0)		
K19		29	糸あり	ミガキ	灰 (N4/1)		
K20		19	板ナデ	布目	凹面：暗灰 (N3/0) 凸面：灰 (N4/0)		

表8 平瓦観察表

No.	出土地	名称	計測値 (mm)	色調	備考
M1	SD-01 2層	鉄錆玉	長径 (13) 短径 (13)	白色	
M2	SD-01 3層	鉄錆玉	長径 (12) 短径 (11)	白色	

表9 金属製品観察表

【凡例】

1 表中で使用している略称については、以下の通りである。

□：口径　復口：復元口径　底：底部径　復底：復元底部径　高：器高　〔胎〕：胎土色調

〔釉〕：釉色調　〔断〕：断面色調　〔外〕：外面色調　〔内〕：内面色調

2 色調は、「新版標準土色帖」に拠る。

3 表中の遺物番号と本文中の遺物報告番号は一致する。

4 表中で使用している編年・分類については、以下の文献に拠った。

○土師器羽釜：川口宏海「16世紀における大和型土釜の動向」「中近世土器の基礎研究」VI 1990

菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」「文化財論叢」1983

○瓦質土器摺鉢：近江俊秀「大和瓦質摺鉢考」「研究紀要」第2集 1994

佐藤亜聖「大和における瓦質土器の展開と画期」「中近世土器の基礎研究」 XI 1996

○須恵器：森田稔「中世須恵器」「概説中世の土器・陶磁器」1995

○常滑焼：中野晴久「常滑・渥美」「概説中世の土器・陶磁器」1995

○信楽焼：松澤修「緊急雇用創出特別対策事業に伴う出土文化財資料化収納業務報告書 I」2004

○瀬戸・美濃焼：愛知県史編さん委員会「愛知県史」別編庶民 2, 2007

○白磁：森田勉「14~16世紀の白磁の型式分類と編年」「貿易陶磁研究」第2号 1982

報告書抄録

ふりがな	つついじょうだい8じちょうさほうこくしょ							
書名	筒井城第8次調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名	大和郡山市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	14							
編著者名	山川均・長谷川義明・大江綾子							
編集機関	大和郡市教育委員会							
所在地	〒639-1198 奈良県大和郡山市北郡山町 248-4							
発行年月日	2009.1.30							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
つついじょうだい8じ 筒井城第8次	奈良県 やまとこおりやまし 大和郡山市 つついちょう 筒井町 1483-1	29203	8-C-49	34° 37' 21"	135° 46' 57"	2005.1.5 ~ 2005.2.28	177	範囲確認
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
つついじょうだい8じ 筒井城第8次	城館跡	中世	堀（16世紀）	土器、陶磁器、 瓦、鉄砲玉				

筒井城第9次発掘調査報告書

例　　言

1. 本書は、平成17年度市内遺跡発掘調査等事業（国庫補助事業）として実施した筒井城第9次発掘調査の報告書である。

2. 調査は下記のとおり実施した。

調査地 大和郡山市筒井町1477

調査期間 平成18年1月23日～平成18年2月28日

調査面積 66m²

調査原因 範囲確認及び農業用倉庫の建築

調査体制 調査機関 大和郡山市教育委員会

　　教育長 山田勝美

　　教育部長 木下平一

　　社会教育課長 岩本正和

　　社会教育課長補佐 大西功修

調査担当 社会教育課文化財係長 服部伊久男

3. 調査に際しては土地所有者である井本洋典氏（筒井町1447）から多大のご理解とご協力を賜った。記して感謝いたします。

4. 調査及び遺物整理には下記のものが参加した。

　　調査：下高大輔（奈良大学大学院・現太宰府市教育委員会）、整理：大江綾子（奈良大学）

5. 調査に当たっては下記の方々から指導助言を賜った。

　　佐藤亜聖（財団法人元興寺文化財研究所）、金松 誠（香芝市教育委員会・現滋賀県埋蔵埋文化財センター）

6. 本書の執筆はII-2を大江、他を服部が担当し、編集は服部が担当した。

凡　　例

1. 遺構実測図に示した標高は、全て東京湾平均海面（T.P）からのプラス値である。

2. 遺構実測図中の座標は、世界測地系に基づくものである。また、図中矢印で示した方位は磁北を示す。

3. 遺物番号は全て通し番号になっており、実測図・観察表・図版それぞれの対照が可能である。

4. 遺物実測図の断面は、陶磁器・須恵器がベタ塗り、瓦器・瓦質土器・瓦がアミがけ、土師器は白抜きとしている。

5. 土色および遺物の色調に関しては、「新版標準土色帳」に掲る。

本文目次

I 調査の契機と経過.....	37
II 調査の概要.....	38
1 遺構	38
(1) 第1トレンチ	
(2) 第2トレンチ	
2 遺物	41
(1) 第1トレンチ出土遺物	
(2) 第2トレンチ出土遺物	
III まとめ.....	49

図目次

図1 調査位置図 (S=1/5000)	37
図2 トレンチ配置図 (S=1/400)	37
図3 調査前全景 (南西から)	37
図4 小字「シロ」の高まりと調査地 (西から)	37
図5 遺構平面図 (S=1/200)	38
図6 第1トレンチ調査風景 (南西から)	38
図7 第1トレンチ全景 (南から)	38
図8 第1トレンチSD01西壁土層図 (S=1/60)	39
図9 第1トレンチ全景 (北東から)	39
図10 第1トレンチSD01南半 (北から)	39
図11 第1トレンチ杭列 (東から)	39
図12 第1トレンチ杭列 (西から)	39
図13 第2トレンチ南壁土層図 (S=1/60)	40
図14 第2トレンチ全景 (東から)	40
図15 第2トレンチ全景 (南西から)	40
図16 第2トレンチ土層堆積状況 (北西から)	40
図17 調査後全景 (東から)	40
図18 第1トレンチSD01上層出土遺物実測図	41
図19 第1トレンチSD01上層出土遺物写真	42
図20 第1トレンチSD01下層出土遺物実測図	42
図21 第1トレンチSD01下層出土遺物写真	42
図22 第2トレンチSD01上層出土遺物実測図	44
図23 第2トレンチSD01上層出土遺物写真①	45
図24 第2トレンチSD01上層出土遺物写真②	46
図25 第2トレンチSD01上層出土遺物写真③	47
図26 金属製品および石製品	47
図27 金属製品および石製品写真	47
図28 SD01上層出土木製品実測図	48
図29 SD01出土木製品写真	48

表目次

表1 第1トレンチ出土遺物観察表	50
表2 第2トレンチ出土遺物観察表	50
表3 平瓦・丸瓦計測表	50
表4 軒平瓦計測表	51
表5 金属製品および石製品計測表	51
表6 木製品計測表	51

I 調査の契機と経過

平成17年12月に筒井町1477番地における農業用倉庫の建築に伴う「埋蔵文化財発掘届出書」が提出された。届出地は筒井城の中心部である小字「シロ」の高まりの北側に隣接し、第4次及び第8次調査の成果から、内郭を取り囲む内堀の存在が推定されている場所である。そのため事前の調査を実施する必要が生じ、地権者と協議を重ね、了解を得ることができたため今次の調査の実施にいたったものである。

調査地は、里道をはさんで南側には住宅が一軒、水路をはさんで北側には最近分譲された习近平新しい住宅が建っている。東側は駐車場や道路として利用され、西側には蓮池が広がっている。調査前は土地所有者の駐車場、花畠として利用されていた。

調査は内堀の確認を主目的として実施した。範囲確認調査は1477番地の内、倉庫が建設される部分を除いた西側の残地92m²を対象として第1トレンチを配して、農業用倉庫の建築に伴う調査は195m²を対象として第2トレンチを配して実施した。

調査は平成18年の1月末～2月にかけて実施し、表面の硬く締まった盛り土を小型のバックホーで除去したが、以後はすべて手掘りにより調査を進めた。(服部)



図1 調査位置図 (S=1/5000)

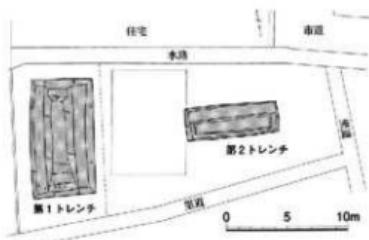


図2 トレンチ配置図 (S=1/400)



図3 調査前全景 (南西から)



図4 小字「シロ」の高まりと調査地 (西から)

II 調査の概要

1 遺構

(1) 第1トレンチ

長さ9.5m、幅5mの南北トレンチ。厚さ約50cmの近年の盛土の下には旧蓮畠時の表土床土が厚さ約30cmにわたって堆積している。これを除去すると、内堀SD01の埋土が検出される。E～I層(上層)は地山である黄灰色粘土のブロックを多量に含む灰褐色土であり、遺物も多い。厚さ1mにおよぶ人為的な埋土である。その下部には厚さ50cmのJ～N層(下層)が堆積する。これは堀内の自然堆積土であり、L・M・N層には細かい植物遺体が多く含まれていた。O・P・Q層も堀肩に堆

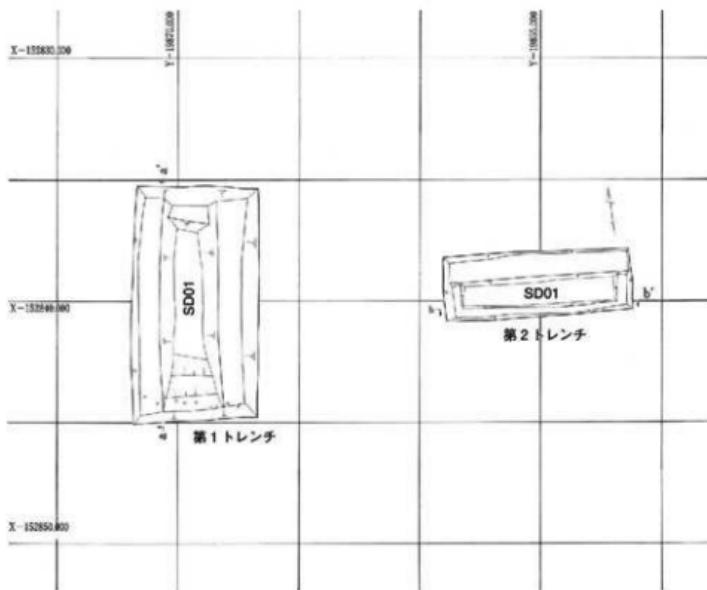


図5 遺構平面図 (S=1/200)



図6 第1トレンチ調査風景 (南西から)



図7 第1トレンチ全景 (南から)

積した初期の自然堆積土と考えられる。この層の上から杭が打ち込まれ、東西方向に並ぶ9本の杭列が検出されている。護岸を目的としていると推定されるが横板は検出されていない。内1本をサンプル的に抜き取ったが、長さ110cmが遺存し、先端部を長さ25cmにわたって面取り尖らせている。他の部分は樹皮を残したままで、また、全体に節立った木をそのまま利用している。

堀底は比較的平坦な様相であり、湧水も認められた。堀の南壁面はなだらかな法面となる。この法面は現状の切岸状の斜面につながるものと推定されるが、幅の狭いテラス面が造作されていた可能性も残されている。北堀面は未検出であるが、現状の水路部分、北側住宅地との境目あたりが北岸と考えられる。

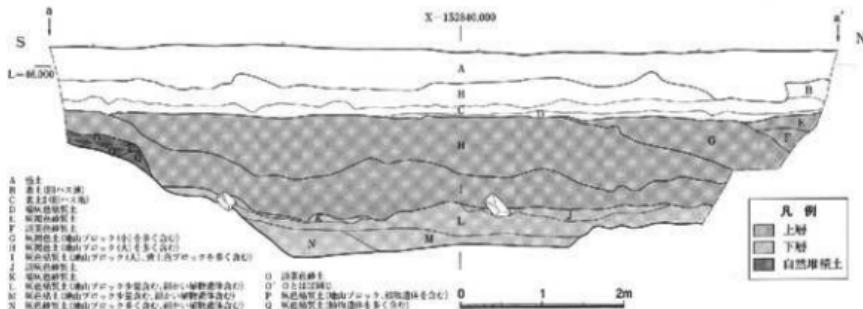


図8 第1トレンチ SD01 西壁土層図 (S=1/60)



図9 第1トレンチ全景 (北東から)



図10 第1トレンチ SD01 南半 (北から)



図11 第1トレンチ杭列 (東から)



図12 第1トレンチ杭列 (西から)

埋土からは、土師器、瓦、瓦質土器、陶磁器、鉄製品、建築部材などが出土し、おおむね16世紀の中葉に掘が埋立てられたことが判明した。

(2) 第2トレンチ

幅3m、長さ7.5mのトレンチで第1トレンチと直行する方向に設定した。約60cmの盛土、旧蓮畠時の表土約50cmを除去すると、内堀SD01の埋土が検出される。i・j・k層（上層）であり、地山のブロックが多く含まれている。

トレンチ幅が狭く、掘削深度も大きくなつたこと、また、堀はさらに東側まで伸びていることが確認されたので、これ以上の掘り下げは行わなかつた。埋土からは第1トレンチと同時期の遺物が出土し、また、鉄鏡玉1個も出土した。(腹部)

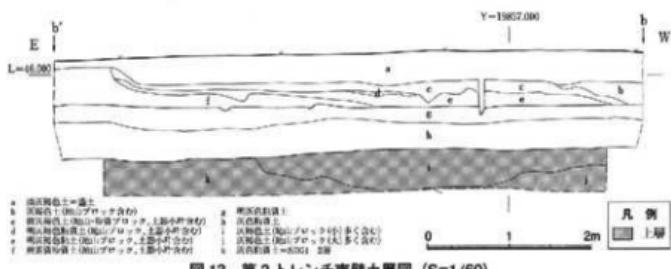


図 13 第2トレーナー南壁土層図 (S=1/60)



図 14 第2トレンチ全景（東から）



図 15 第2トレーナー全景(南西から)



図 16 第2トレンチ土層堆積状況（北西から）



図 17 調査後全景（東から）

2 遺物

(1) 第1トレンチ出土遺物

SD01上層出土遺物

P1(図19右)は白磁皿である。中国製陶磁と思われる。底部から口縁部まで残る。内面の調整は不明瞭である。外面はケズリを施す。全体に施釉されており、見込みに胎土目を有する。割高台。

1は土師器羽釜の口縁部である。頸部外面の約80%に煤が付着する。外面はタタキ、内面はナデを施す。頸部外面には強いナデが施され、段を有する。菅原分類大和I₂型（菅原1983）、川口編年III-1型式（川口1990）に相当し、16世紀後半に属する。

2～6は平瓦である。2・4は凸面、3・5は凹面にそれぞれ火を受けた痕跡があり、一部銀化している。3は凸面全体に離れ砂が付着している。6は凸面の一部に離れ砂が付着している。

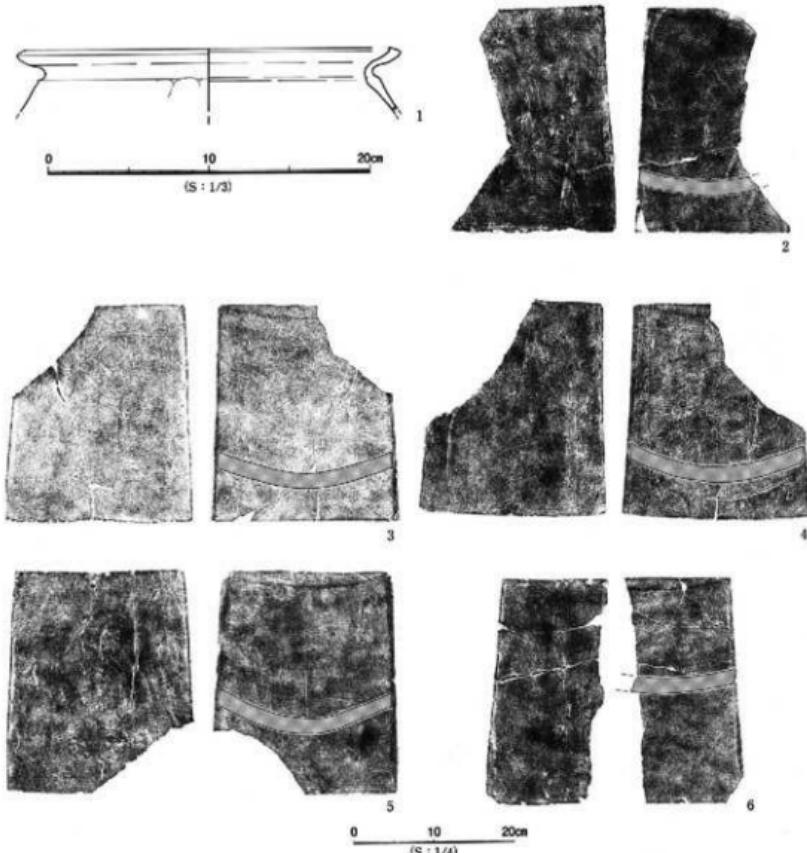


図18 第1トレンチ SD01 上層出土遺物実測図

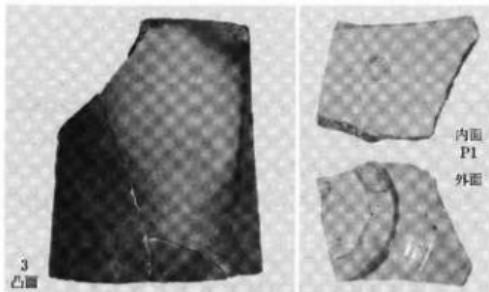


図19 第1トレンチSD01上層出土遺物写真

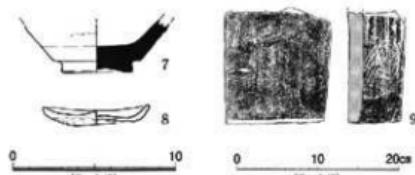


図20 第1トレンチSD01下層出土遺物実測図

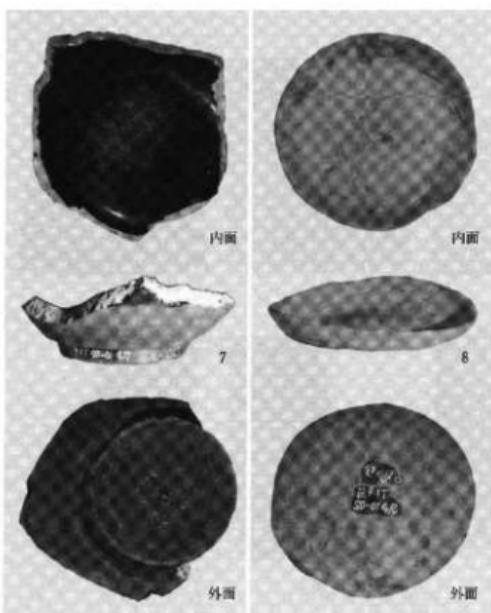


図21 第1トレンチSD01下層出土遺物写真

これらの遺物群の年代については前述の第2トレンチの当該層に対応する層からの出土遺物も勘案すれば16世紀後葉と考えられる。

SD01下層出土遺物

7は瀬戸・美濃焼天目茶碗底部である。全体的にシャープなロクロ削りが施されている。底部外面露胎部分全體に泥漬を塗布している。藤澤編年大窯第2段階（愛知県史編さん委員会2007）で、時期は16世紀中葉と考えられる。8は土師器皿である。底部中央を押し上げて成形した、いわゆる「へそ皿」である。内面には不定方向のナデが施され、外面には布目の痕跡がある。9は丸瓦である。凹面には糸切り痕および布目痕跡が明瞭に残る。凸面には幅約1cmのヘラミガキが縱方向に施されている。

(2) 第2トレンチ出土遺物

SD01上層出土遺物

第1トレンチSD01上層に対応する層で、本来同一層から出土した遺物群である。

10・11は中国製染付（青花）小皿である。ともに高台内側に離れ砂が付着している。また、内外面の口縁部付近および高台脇に一重の圈線をめぐらせる。10の見込み部分は、二重圈線の内側に文様を描く。意匠は不明。高台部分に離れ砂が付着する。11は見込み部分に一重の圈線をめぐらせる。高台部分に離れ砂が付着する。12は中国製青磁碗の底部で、龍泉窯系である。全体に施釉されている。外面にはケズリを施す。13は白磁碗底部である。産地不明。見込みは鐘頭心状をなし、兜巾高台である。高台内を削り出したのちナデを施す。14・15は土師器皿である。

14は内面と口縁部外面に施されたナデが明瞭に残る。15は底部中央を押し上げて口縁を強く外反させた、いわゆる「へそ皿」である。内面および口縁部外面はナデを施す。底部には指頭圧痕が残る。16・17は土師器羽釜の口縁部である。内面はナデを施しわずかにあて具の痕跡が残る。外面はタキ痕を有する。ともに菅原分類の大和I₂型、川口編年のIII-1型式に相当し、16世紀後半に属する。18は瓦質土器の口縁部である。器種不明。内外面ともにナデが施されている。なお、外面および断面の一部が熱を受けて変色している。19は瓦質土器火鉢の口縁部である。外面のスタンプは七宝文の中に花菱を描いたものである。還元不良のため内外面ともに灰白色を呈する。20は瓦質土器土管である。内面はナデ、外面はタキを施す。21・22・24は瓦質土器摺鉢である。21の外面はハケ日が残る。土師質化しており内外面ともに、にぶい黄橙色を呈す。口縁部がわずかに残るのみで時期を特定しづらいが、近江繩年の4期（近江1994）、佐藤編年のD期（佐藤1996）に相当する可能性が高い。この場合、その所属する時期は15世紀末～16世紀第3四半期となる。22は外面に1cmあたり2～3条のハケ目が施されている。底部内面に強い円周ナデを施す。やや還元不良。24の内面には使用痕がはっきりと残る。口縁部外面は、強く横ナデが施されているため段を有し、断面はゆるやかなS字状を呈する。近江編年7期、佐藤編年F期に相当し16世紀中頃～末である。23は瓦質土器こね鉢である。内面には1cmあたり3本のヘラミガキが、底部内面は円周に沿って2条のヘラミガキが施されている。外面下3分の2はユビオサエの後タテハケが、上2分の1にはヨコナデ（一部タテハケ・ヨコハケ）が施される。底部外面は未調整で離れ砂が付着する。25・26は唐草文軒平瓦である。いずれも連続して4回反転する唐草文を配し、中心飾を欠く。前者は郡山城102E型式と同范の可能性が強い（山川1995）。

以上により、これらSD01上層出土遺物群の時期は、16世紀後半と考えられる。

金属製品および石製品 27～30は全てSD01上層より出土した。27の鉄砲玉のみ第2トレンチ出土である。一部平らになっている部分があり、着弾時の痕跡と考えられる。鉛製。28・29は用途不明金属製品である。なお、両者は連結した状態で出土した。鉄製。30は砥石（仕上げ砥）である。使用時の擦痕が見られるのは片面のみである。粘板岩製。

木製品 W1～W3は、第1トレンチSD01上層より出土した。W1は折敷の底部と考えられる。約16cm四方の板の四隅を切り取り、さらにその角を切り落とす。左右に2つずつ並列して直径1mm前後の穴が開けられている。また、下方には1つの穴が開けられている。W2は用途不明木製品である。面取りされた面（図左）と平滑な面（図右）がある。1ヶ所だが穴が開けられており、そこには樹皮と見られるものが通されている。W3は建築部材である。全長114cmで、直径は11cm。一方の先端部分に約3cmの枘を削り出しが、もう一方は平らである。枘を削り出している方は一部炭化している。広葉樹材。W4は第1トレンチより出土した杭である。全長110cm。一方の先端部25cmほどを削り尖らせる。その他の部位には樹皮が付いたままの状態である。広葉樹材。（大江）

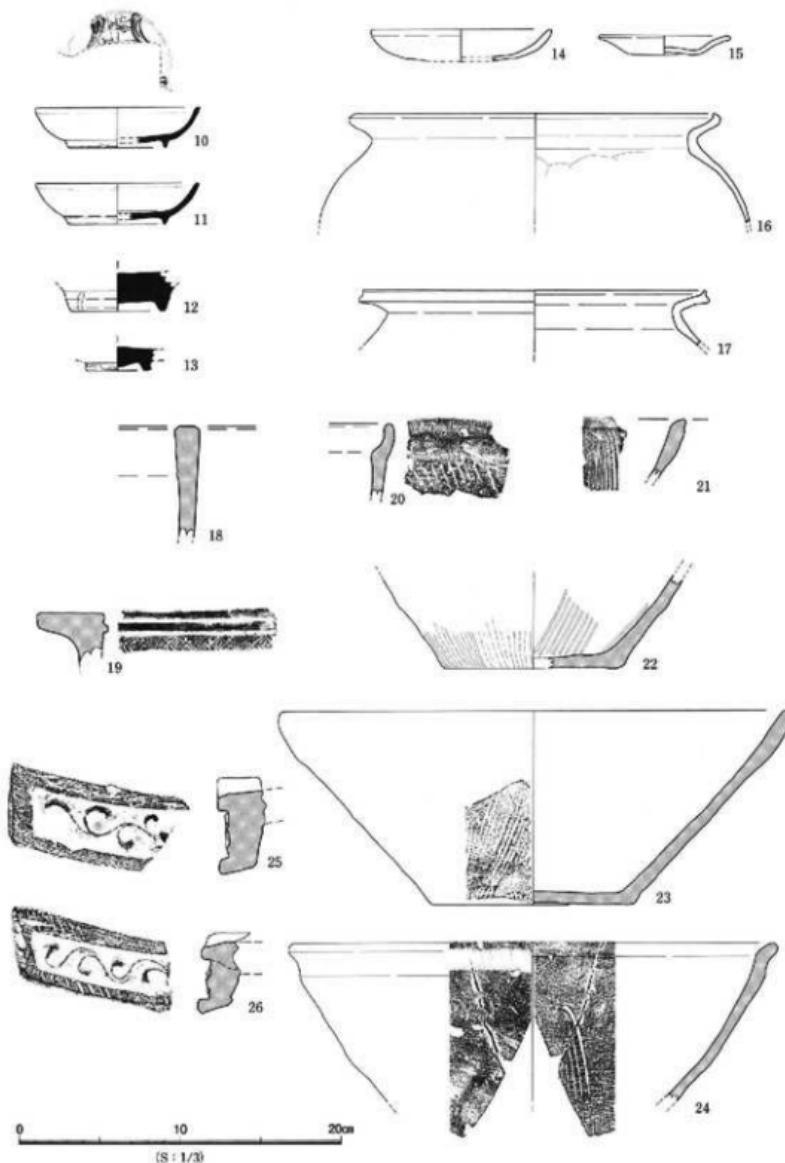


図 22 第2トレンチ SD01 上層出土遺物実測図

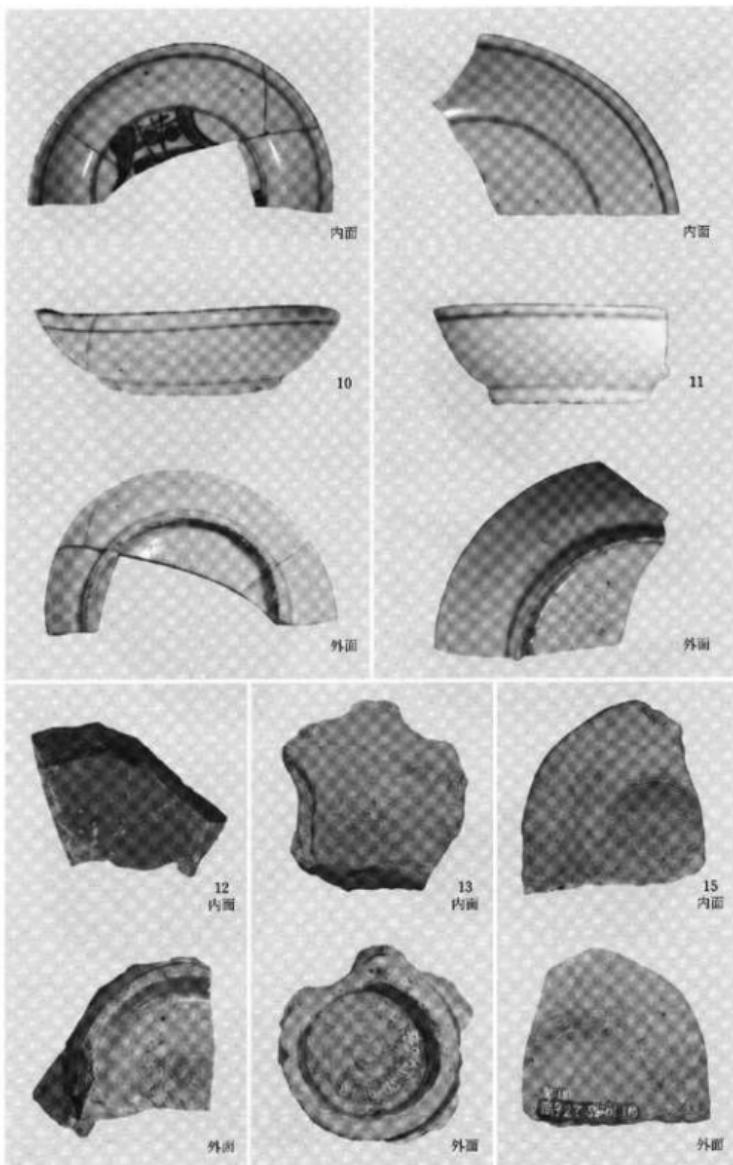


図23 第2トレンチ SD01上層出土遺物写真①

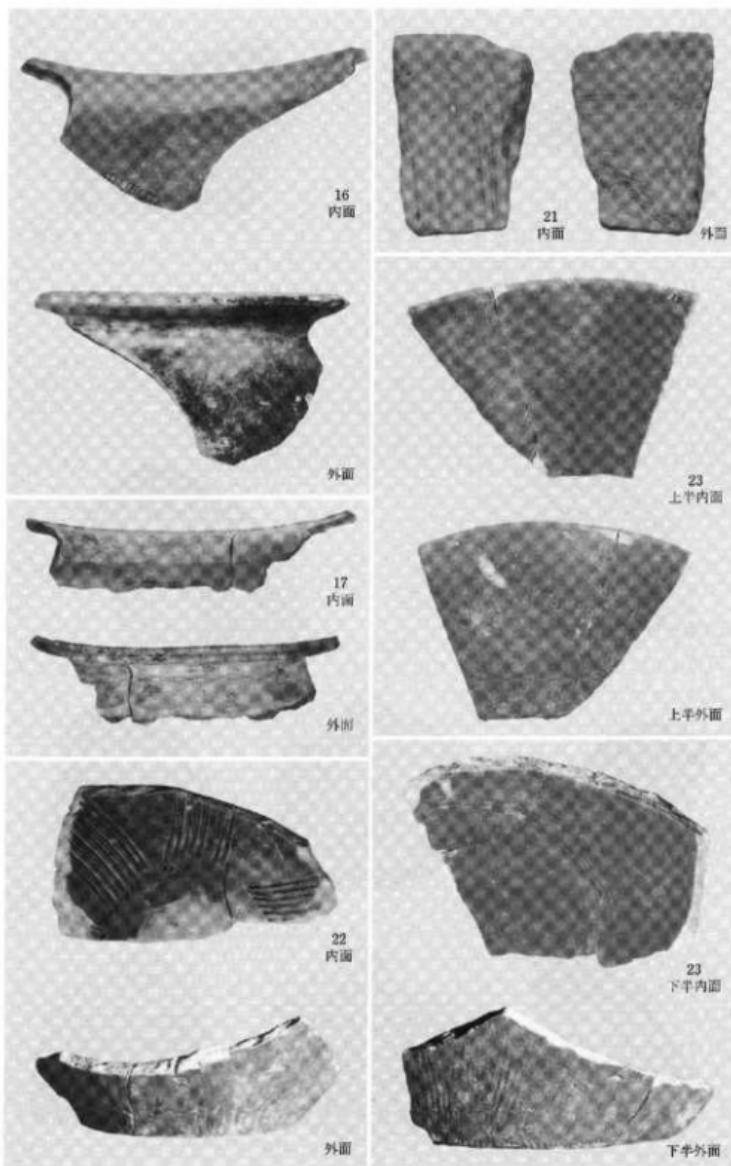


図 24 第2トレンチ SD01 上層出土遺物写真②

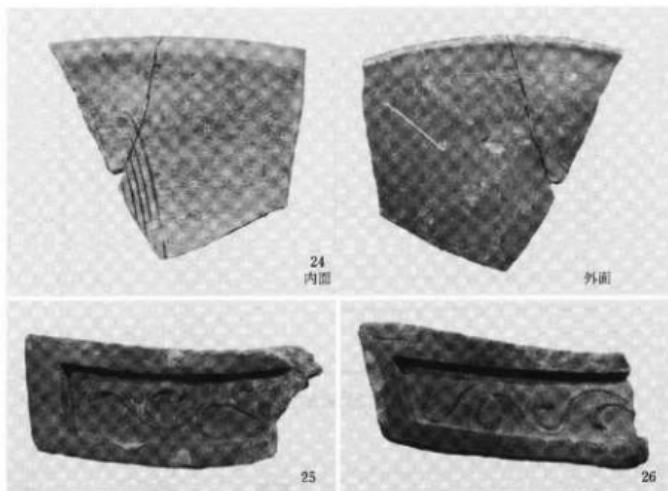


図25 第2トレンチ SD01 上層出土遺物写真③

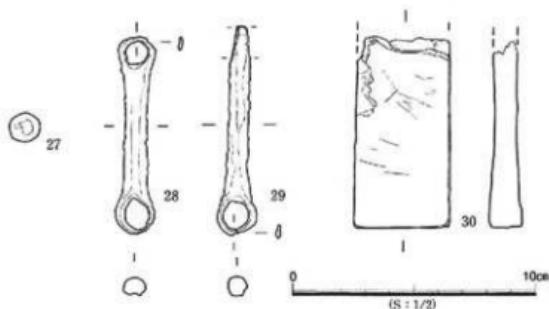


図26 金属製品および石製品

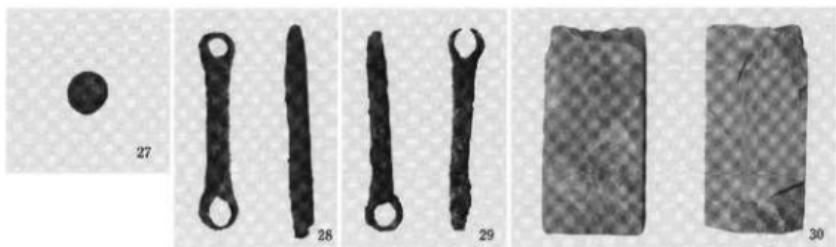


図27 金属製品および石製品写真

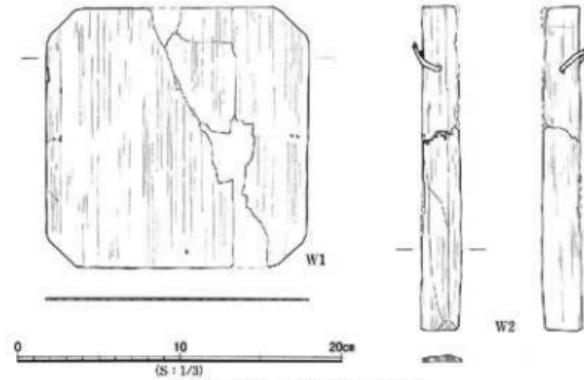


図 28 SD01 上層出土木製品実測図

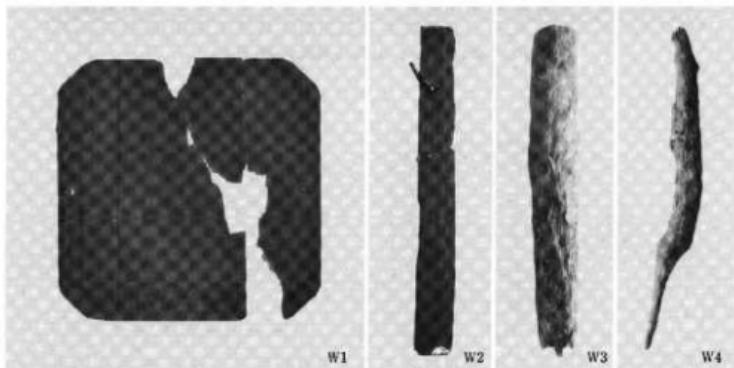


図 29 SD01 出土木製品写真

III まとめ

内堀の規模は推定で幅約15m、深さ1.6mとなるが小字「シロ」の高まり部分から計測すると、深さは3mほどになる。堀底は平坦であり、若干の水堆が推定される。堀が掘削された時期は明確ではないが、埋め立てられたのは人為的な埋土と判断される上層から出土した遺物からみて16世紀の中葉である。第4次調査、第8次調査でも同時期に内堀が埋め立てられていることが判明しており、今回も同様の様相を確認することができたのは大きな成果である。また、内堀が内郭を大きく取り囲む形態であることも明確になったが、より東側にどのような状態で続いていたのか、土橋や道によって切断されていたのかなどの課題を負うこととなった。(服部)

【参考文献】

- 近江俊秀「大和瓦質摺鉢考」「研究紀要」第2集、1994
川口宏海「16世紀における大和型土釜の動向」「中近世土器の基礎研究」VI、1990
佐藤亞聖「大和における瓦質土器の展開と画期」「中近世土器の基礎研究」XI、1996
菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」「文化財論叢」、1983
山川 均「郡山城出土の軒瓦について」「織豊城郭」第2号、1995
愛知県史編さん委員会「愛知県史 別編 窯業2」、2007

No.	出土地	器種名	計測値(cm)	断土	色調	備考
P1	SD01 上層	白磁瓦	高(2.1)	精良	(輪) 灰白 (2.5YB/1) (胎) 灰白 (2.5YB/2)	見込みに目跡あり 全体に施釉 割り高台
1		土器器羽釜	復口(23.0)	石英・長石・雲母の微混合 む	灰白 (10YR8/2)	大形 I 型 II-1 型式
7	SD01 下層	面E-先端天目茶碗	灰(4.4)	軟質、緻密	(輪) オリーブ灰 (7.5Y3/1) (胎) 褐褐 (10YR3/4) (胎) 灰白 (10YR8/2)	大形 2 段階 器底部に泥斑衛布
8		土鍋皿	口(6.7) 高(1.2)	チャート・雲母微量に含む	にぶい黄褐 (10YR7/2)	

表1 第1トレーンチ出土遺物観察表

No.	出土地	器種名	計測値(cm)	断土	色調	備考
10		中国製陶付小皿	復口(10.2) 高(2.5) 復底(6.0)	精良		
11		中国製陶付小皿	復口(10.1) 高(2.6) 復底(5.8)	精良		
12		鹿糸織系青磁碗	復底(5.8)	精良	(輪) オリーブ灰 (2.5YB/1) (胎) 浅黄褐 (7.5YR8/3)	
13		白磁碗	灰(3.9)	精良	(輪) 灰白 (10YB/1) (胎) 灰白 (2.5YB/1)	
14		土器皿	復口(11.1)	石英・長石・雲母含む	灰白 (2.5YB/1)	
15		土器皿	復口(6.0) 高(1.3)	石英・長石・雲母含む	灰白 (2.5Y7/2)	
16		土器器羽釜	復口(22.3)	石英・長石・雲母含む	(外) 灰白 (2.5YB/2) (内) 黄褐 (2.5Y6/2)	大形 I 型 II-1 型式
17	SD01 上層	土器器羽釜	復口(21.1)	石英・長石・雲母含む	灰白 (10YR8/2)	大形 I 型 II-1 型式
18		瓦質土器		石英・長石・雲母含む	(外) 灰白 (N3/0) (内) 灰白 (10YR5/1)	
19		瓦質土器火鉢		石英・長石・雲母含む	(外) 灰白 (10YR8/2) (内) にぶい黄褐 (10YR5/3)	七宝文の中に化粧 透光不良
20		瓦質土器土管		石英・長石含む	灰 (N4/0)	
21		瓦質土器滑鉢		長石・雲母含む	(外) 灰 (2.5YR6/6) (内) にぶい黄褐 (10YR7/2)	近江編年 4 期 佐藤編年 D 期 透光不良
22		瓦質土器滑鉢	復底(11.0)	石英・長石・雲母含む	淡黄 (2.5Y8/3)	やや透光不良
23		瓦質土器ごね鉢	復口(31.9) 底(12.0) 復底(12.5)	石英・長石多く含む	(輪) 灰白 (2.5Y8/2)	
24		瓦質土器滑鉢	復口(30.0)	石英・長石・雲母含む	(外) 灰 (5Y5/1) (胎) 灰白 (2.5Y8/1)	近江編年 6 期 佐藤編年 E 期 やや透光不良

表2 第2トレーンチ出土遺物観察表

No.	出土地	種類	計測値(cm)					備考	
			全長	広幅	狭幅	厚さ	底深		
2	第1トレーンチ SD01 上層	平瓦	281			20	18	ナダ	凸面に受熱痕跡
3		平瓦	269	228		20	26	タキ	凹面に受熱痕跡、一部鉛化 全体にハナレ粉付着
4		平瓦	270	233		21	27	ナダ	凸面に受熱痕跡、一部鉛化
5		平瓦	276		202	20	33	板ナダ	凹面に受熱痕跡、漢付着
6		平瓦	288			21		ナダ	凹面に受熱痕跡、漢付着 凸面に一部ハナレ粉付着
9	第1トレーンチ SD01 下層	丸瓦			121	18		ヘラミガキ	糸引き痕

表3 平瓦・丸瓦計測表

No.	出土地	瓦当文様	色調	瓦当残存率	備考
25	第2トレンチ SD01	均整唐草文	暗灰(N3/0)	40%	
26		均整唐草文	暗灰(N3/0)	40%	瓦当面に焼付着。

表4 軒平瓦計測表

No.	出土地	種別	計測値(cm)	色調	備考
27	第2トレンチ SD01	鉢底瓦	長径(13) 幅径(12)	暗灰(N3/0)	鉢製
28	第1トレンチ SD01 上層	鉢製品	全長(82)		用途不明
29		鉢製品	全長(87)		用途不明、28と連続
30		砾石(柱上部)	高(79) 幅(39) 厚(14)		砂岩製

表5 金属製品および石製品計測表

No.	出土地	種別	計測値(cm)	材質	備考
W1		折敷	高(16.1) 幅(16.2) 厚(0.1)		
W2	第1トレンチ SD01 上層	用途不明木製品	高(22.0) 幅(2.45) 厚(0.4)		
W3		建築部材	高(114.0) 直径(11.0)	広葉樹	
W4	第1トレンチ SD01	杭	高(110)	広葉樹	

表6 木製品計測表

【凡例】

- 表中で使用している略称については、以下の通りである。
 口：口径　複口：復元口径　底：底部径　復底：復元底部径　高：器高　（胎）：胎土色調
 （種）：釉薬色調　（断）：断面色調　（外）：外面色調　（内）：内面色調
- 色調は、「新版標準土色帖」に掲げる。
- 表中の遺物番号と本文中の遺物報告番号は一致する。
- 表中で使用している編年・分類については、以下の文献に掲載した。
 ○上部器皿釜：川口安海「16世紀における大和型土釜の動向」「中近世土器の基礎研究」VI 1990
 香原正明「畿内における土釜の製作と流通」「文化財論叢」1983
 ○瓦質土器指鉢：近江俊秀「大和瓦質指鉢考」「研究紀要」第2集、1994
 佐藤亜聖「大和における瓦質土器の展開と期別」「中近世土器の基礎研究」II、1996
 ○瀬戸・美濃焼：愛知県史編さん委員会「愛知県史」別編史業2、2007

報告書抄録

ふりがな	つつじょうだい9じちょうさほうこくしょ							
書名	筒井城第9次調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名	大和郡山市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	14							
編著者名	服部伊久男・大江綾子							
編集機関	大和郡市教育委員会							
所在地	〒639-1198 奈良県大和郡山市北郡山町 248-4							
発行年月日	2009.1.30							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
つつじょうだい9 筒井城第9次	奈良県 大和郡山市 筒井町 1477	29203	8-C-49	34° 37'	135° 47'	2006.1.23 ～ 2006.2.28	66	範囲確認 農業用倉庫の建築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
つつじょう 筒井城	城館	戦国期	内堀	瓦・陶磁器・ 土器類ほか				

大和郡山市文化財調査報告書第14集
筒井城第8次・第9次発掘調査報告書

平成21(2009)年1月30日

編集・発行 大和郡山市教育委員会
大和郡山市北郡山町248-4

印 刷 共同精版印刷株式会社
奈良市三条大路2丁目2番6号